『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)
—第二部(§§66-192)の分析を通じて—

鬼 界 彰 夫

Wittgenstein's Thinking in *On Certainty* (1)

Akio KIKAI

Abstract

In this paper, we try to apply the concepts of thread of thinking and sequence of thinking and the analytical method based on them, which we developed in our previous paper on *On Certainty*, to the text of the second part of Wittgenstein's *On Certainty* (§§ 66-192), to show their general applicability to Wittgenstein's unedited texts that can be considered to express the real productive process of Wittgenstein's thinking such as *On Certainty*. The results show that this part of the text expresses a stream of well-structured thinking despite its apparent unstructuredness. Moreover, our concepts and method made it possible to extract certain patterns of Wittgenstein's productive thinking process, which could be called "style" and "rhythm" of Wittgenstein's thinking. Which means that our method could open a previously unexplored field of study, whose objects consist not of the contents of Wittgenstein's thinking (what he thought), but of his actual thinking itself (how he thought).

> 私は、自分が書きうる最良ものが常に哲学的覚え書き philosophische Bemerukungen にのみ留まるであろうことを、そして私の思考はその自然な傾向に逆らって一つの方向に無理に向けるとすぐに麻痺してしまうことを悟った。―もちろんこれは探究の性質そのものと関係している。すなわちそれは広大な思考領域を縦横無尽にあらゆる方向へと旅し尽くすことを我々に強いるのである。　（『哲学探究』「序文」より）

本論は拙稿「『確実性について』の主題と構造（上）、（中）、（下）」[1] の厳密な意味での続編であるが分量が大きくなったため別の論考とした。「(1)」としたのは本論に続くべき『確実性』第三部と第四部の分析論考との関係を考慮したものである。「スレッド」、「シークェンス」といった諸概念と本論で用いられる分析方法については同論考（下）を参照されたい。（下）においては同手法による『確実性』第一部の分析がなされている。

1　『確実性』第二部の分析が充たすべき要件と分析の手順

本論において我々は『確実性』第二部の分析を試み、それを通じてウィトゲンシュタインの思考の特質、構造、スタイル、リズムについて考察するが、具体的分析に着手する前にこの分析が充たすべき要件、言い換えるならば分析において我々が目指すべき目標を明らかにしておくのが適当と思われる。

ある意味で『確実性』第二部の分析はスレッド―シークェンス分析という我々の方法とそれを支える諸概念の試金石である。何故ならこの方法が『確実性』第二部に適用され、その結果第一部で見られたような構造が第二部においても示された時初めてスレッドやシークェンスといった諸概念が『確実性』第一部に対してのみ適用できるアドホックなものではなく、『確実性』全体を貫き、それを構成している生成原理であることが一定の説得力をもって示されるからである。具体的には第二部の分析は次の四点を示さなければならない：1）スレッドとシークェンスを核とするウィトゲンシュタインの思考独特の（と我々が主張する）構造が第二部にも存在すること、2）その構造の中で第二部の思考運動全体が固有の一体性・完結性を示し、第二部が思考運動の単位（ムーヴメント）であること、3）第二部に現れる思考の糸（スレッド）が第一部のスレッドの継続であり、その意味で第一部と第二部の間に一つの大きな思考運動

の部分間に見られるはずの連続性が存在すること、４）第二部で出現する諸契機・諸問題の中で第二部において解消・解決されないものが存在し、それらが第三部以降の思考運動の潜在的原動力となりうること。これら四点の実現を目標としながら分析を次の手順で遂行してゆきたい。

第二章で先ず第二部の大まかな構造を示し、それが幾つのシークェンスにどのように分割されるのか、各シークェンスに登場するのはいかなるスレッドなのかを示した上で、第二部に登場するスレッドのそれぞれについて説明する。次いで第三章で各シークェンスについてその区切りがどのように見出されるのか、それは一つのシークェンスとしてどのような一体性を持つのかを考察する。続く第四章で第二部の各シークェンスの内部構造とそれら相互の関係について考察する。これが本論の分析の核となる考察であり、多くの労力を要求する力仕事である。やや長大ではあるがこれはウィトゲンシュタインの思考の特質や構造といったより興味深い主題について明確な言葉で語るためにどうしても必要な下準備であり、同時にそれ自身がウィトゲンシュタインの思考の在り方の考察であるので、読者には忍耐をもって目を通されることをお願いしたい。その後第五章でこの分析に基づいて第二部全体の思考運動としての一体性、すなわちその大きな構造がどのようなものなのかを示したい。第六章ではこうした第二部の大きな思考の運動の中で解消されざる緊張・問題が何であり、解明されざる不透明部分が何なのかを示すことにより、第二部が今後の思考の運動に対して持つ潜在力を示し、第三部以降の思考運動がどのような方向に進むと予測されるかを示し本論考を終えたい。

２．第二部のスレッドとシークェンス

第二部の構造の細部の分析、とりわけそれぞれのシークェンスの内部構造と各スレッドの展開を明らかにする前に、第二部の大まかな構造を示すことは細部に埋没せず全体的理解を確保する上で必要かつ有益であると思われる。以下に示す見取り図はこうした大まかな構造を視覚化したものである。第二部の様な思考運動単位（ムーヴメント）の見取り図とは、幾つの、そしてどのようなスレッドが相互に関連しながらどのようなシークェンスを次々と生成し、結果としてそのムーヴメントという全体を構成しているのかを一望の下に示すものである。先ずは『確実性』第一部の見取り図を示し見取り図とはいかなるものなのかを説明しよう。図1は第一部の見取り図であるが、その縦軸は思考の糸（スレッド）の継時的流れを、横軸は思考の各同時的現在を形成するシークェンス

を表している。この見取り図から第一部にはα、β、γ、δ、の四つのスレッドが存在し、それらの活動によってⅠからⅩまで十のシークェンスが構成され、それらから第一部が成り立っていることが先ず読み取れる。各シークェンスを表す長方形の中の縦の矢印はそのシークェンスを生成したスレッドを表している。二重矢印はスレッドがそのシークェンスの思考を支配的に生成していること、一重矢印はスレッドがそのシークェンスの思考に一時的に関与していることを示している。例えば、シークェンスⅠは、α1、α2、α3、β1、β2、δ1、という六つのサブスレッドとγという一つのスレッドの一時的関与の集積であること、シークェンスⅤはスレッドαに支配され同時にサブスレッドδ2がそこに関与していることなどがこの見取り図から読み取れるのである。更に四つのスレッドの矢印の全体的な配置から、第一部の思考運動全体の流れを推察することもできる。シークェンスⅠやⅢを四つの矢印が貫いているのに対し、Ⅳ以降のシークェンスには多くとも二つの矢印しか存在していない。すなわち第一部ではシークェンスが進行するにつれ、それに関与する思考の糸の数が次第に減少するのである。これは第一部において多くの（サブ）スレッドが次第に少数のスレッドへと統合されてゆくことに対応している。このように第一部の見取り図は第一部の思考の大きな流れとは、始め多く存在していた思考の諸契機が次第に統合され、より単純で本質的な主題が次第に形成されゆく過程に存することである、と物語っていると解釈できるのである。この他にも第一部の思考運動の特性について様々なことをこの見取り図から読み取ることができる。例えば、各スレッドの矢印がⅥ、Ⅶ、Ⅸ、の三つのシークェンスにおいて停止していることから、それら三シークェンスが第一部の三つの結論部であること、シークェンスⅩに矢印が存在していないことからその思考が他の部分の思考から孤立していること、などである。

＜図１　『確実性』第一部の見取り図＞

シークェンスとその内容		各シークェンスに登場するスレッド			
		＜ムーア解釈＞ α	＜誤りの限界＞ β	＜観念論批判＞ γ	＜心的状態批判＞ δ
Ⅰ 1－9	全編の主題の諸契機の先行的発散的提示	↓ α1、2、3	↓ β1、2	↓ γ	↓ δ1
Ⅱ 10－18	「私は‥と知っている」の用法と概念	↓ α2、3	↓ β1		

III 19-24	ムーアと観念論の論争		α1、2、3	β1	γ　δ1、2
IV 25-29	誤りの限界としての計算の確実性			β1	
V 30-34	ムーアの主張の再解釈		α		δ2
VI 35-37	観念論批判				γ
VII 38-42	心的状態としての知識概念の批判				δ
VIII 43-50	計算の確実性が論理的規定である事			β	
IX 51-60	ムーア言明が誤りの限界を表す論理的命題である事		α	β	
X 61-65	言語ゲームと言葉の意味の変化				

サブスレッド一覧
α1＜ムーアの観念論の批判＞
α2＜ムーアの言説の積極的意義としての「誤りの限界」＞
α3＜ムーアの知識観と「私は・・・と知っている」の用法批判＞
β1＜疑いと誤りの限界＞
β2＜限界の論理的性格＞
γ＜観念論批判＞
δ1＜「私は・・・と知っている」の用法(意味)＞
δ2＜状態としての知識観批判＞

こうした見取り図を第二部について作成したものが図2である。『確実性』第二部（§§66-192）はこの見取り図が示すようにⅠからⅨの九つのシークェンスから構成されている。それらを形成するのが α、β、β′、β″、δ、ε、ξ、の七つの思考の糸（スレッド）である。各シークェンスの内部構造と主題については第四章で詳説することとして、ここでは七つのスレッドとそれらの第二部での役割、及びそれに関連する幾つかの重要な概念について説明したい。

＜図２　『確実性』第二部の見取り図＞

シークェンスとその内容　　各シークェンスに登場するスレッド

		＜ムーア解釈＞ α	＜誤りの限界＞ β	＜限界の無根拠性＞ β'	＜限界の起源＞ β''	＜知る＞ δ	＜実践の変化＞ ε	＜体系の相対性＞ ζ
I 66-83	誤りの論理的限界について		β	β'				
II 84-99	固定化された経験命題としてのムーア命題	α	β	β'		δ	ε	
III 100-108	確信の体系としてのムーア命題	α	β	β'	β''			
IV 109-123	疑いの限界としてのムーア命題の無根拠性	α	β	β'		δ		
V 124-140	判断ゲームの原理としてのムーア命題の無根拠性	α	β	β'				
VI 141-153	経験命題の固定化の起源		β		β''			
VII 154-174	限界の受動的起源と無根拠性	α	β	β'	β''			
VIII 175-181	「私は・・・と知っている」の意味とムーアの誤用	α				δ		
IX 182-192	体系の相対性と真理概念の体系内性		β					ζ

スレッドα　第二部に登場するスレッドαは第一部に登場したスレッドα<ムーア解釈>と同一の思考の糸であり、第一部で到達された思考を受け継ぎそれを更に展開する思考運動を生成するスレッドである。いうまでもなくこの第一部からの連続性はスレッドβとδについてもあてはまる。第二部の見取り図でのスレッドαと他のスレッドの矢印の配置は、このスレッドの本質的特性と、それを通じてこのスレッドが『確実性』の思考運動の中で果たしている固有の役割を示唆している。その特性とは、スレッドαが他の諸スレッドとある場合には結合し他の場合には分離するということを繰り返しながら『確実性』全編を通じて現れたり隠れたりするという運動を反復するというものである。例えば第一部シークェンスIXにおいてスレッドαはスレッドβと融合し<誤りの論理的限界の表明としてのムーア言明>という主題を形成した。しかし第二部におけるスレッドαと他のスレッドの関係の展開は、こうして結合したスレッドαとスレッドβは必ずしも単一のスレッドとして再び分離することなくその後活動し続けるというものでないことを示している。例えば第二部シークェンスⅠやVIはスレッドβ<誤りの限界>が再び単独で思考運動を生成していることを示している。すなわちそこで<誤りの限界>という主題はムーア命題やムーア言明の解釈と切り離された独立した思考対象として考察され思考が展開されているのである。他方シークェンスII、III、IV、VIIでスレッドβはスレッドαと一体となり、<誤りの限界の表明としてのムーア言明>あるいは<誤りの限界としてのムーア命題>という主題の下で思考が展開されている。更にシークェンスVIIIでスレッドαはスレッドδ<知る>というもう一つの主題と一体となり、その主題をムーアの言明の批判という相の下で思考するのである。このように『確実性』のウィトゲンシュタインの思考の一つの特徴は、スレッドβ<誤りの限界>やスレッドδ<知る>といったもともとムーアの問題提起に内包されている（とウィトゲンシュタインが考えた）主題について、それをムーアとは独立した一般的主題として考察し、その後そうした事柄が実はムーアの問題の核心であったのだという形でその考察とムーア解釈を結合させるというものである。スレッドαはこうした不即不離の関係をムーアの問題が内包するすべての主題と持つのであり、その関係に基づいたスレッドαの出現と潜行の繰り返しが『確実性』の思考に固有のリズムを与えているのであり、その中で交差する次の相反する二つの志向の不可分な関係が『確実性』の思考の固有性・本質を形成していると言うことができるだろう。その二つの志向とは、一方でムーアという具体的個人の具体的発話という具体的事象の意味に関

わり続けようとする志向であり、他方でそこに内包されている意味をできる限り普遍的で広大な相の下で解明しようとする志向である。

スレッドβ　第二部の見取り図から読み取れる最も顕著な特徴はスレッドβ<誤りの限界>が第二部の思考全体を支配しているということである。第二部のこの全体的特徴は、単にスレッドβが第二部の始めの七つのシークェンスに連続して登場するという事実のみならず、βから派生したスレッドβ′とスレッドβ″がその内の六つのシークェンスを貫いているという事実の内にも示されている。すなわちスレッドβは自らが反復的に活動することとともに派生スレッドβ′とβ″を従えることにより第二部の思考全体を支配しているのであり、そのことによって第二部のウィトゲンシュタインの思考は「誤りの論理的限界」という単一の主題を巡って展開されているにもかかわらず多面的で多次元的な内容を実現しているのである。第二部で生起しているこうした事態を正確に把握するためには、スレッドが反復的に活動するとはどのようなことであり、スレッドから別のスレッドが派生するというのがどのようなことであるのかを明確にしておく必要がある。

スレッドの反復的活動　第二部見取り図のシークェンスⅠからⅦが示すようにスレッドβは繰り返し活動し七つのシークェンスを次々と生み出している。これはスレッドの反復的活動というものの存在を示している。他方ウィトゲンシュタインのテキストについて反復が多いという指摘がしばしばなされる。事実『確実性』第二部のテキストにも反復される（類似）表現は、「すべては地球が私の生まれるずっと以前から存在していた事を支持し、それに反するものは何もない」、「ムーアの「私は知っている」の代わりに「私には確実だ」を置き換えてみてはどうか」等、少なからず存在する。そしてウィトゲンシュタインのテキストが反復的だと言われる多くの場合そこには多分に否定的意味が込められている。つまりテキストが反復的というのはそこで表現されている思考が反復的であることを意味し、思考が反復的とは思考者の能力の欠如と思考の行き詰まりを示唆しているように思えるのである。従って今我々の前にはウィトゲンシュタインのテキストが示す反復的という現象的特徴の真の意味は何かという問題が横たわっているのである。それは反復的思考という否定的事態を示唆しているのか、それともスレッドの反復的活動の指標なのか、そしてスレッドの反復的活動と反復的思考はそもそも別のものなのか、それとも同一のものなのか、もし別のものであればそれらは両立可能なものか、それとも互いに相

手を排除するものなのか、こうした問いが我々の前に存在するのであり、それらの解決無しには第二部のテキストの構造と価値を正しく判別すること、すなわちそれが繰り返しの多い価値の低いテキストなのか、それとも表面的な繰り返しを通じて重要なことを実現しているテキストなのかを判別することは不可能なのである。これらの問題の解決の鍵は、思考の反復と名の反復使用という全く異なる出来事がテキストにおいて極めて似通った外見をもって現象するということを理解し、その上で両者を厳密に区別することに在るように思われる。ある主題に関わるテキストにおいて思考が反復されるとはある問題の解決を目指す思考者が自らの意志に反してかつて描いた思考の軌跡と同一の軌跡をもう一度描くことであり、それは思考の行き詰まりや思考者の能力の欠如を示唆する否定的繰り返しである。それに対しある概念や思考を指し示す名としての表現を繰り返し使用することは、思考者が同一の主題について思考を継続・展開しようとする限り必然的に起こることであり、思考の行き詰まりや能力の欠如とは全く無縁な現象である。例えば愛についての論考に「愛」という表現が繰り返し出現するからといってそこで同一の思考が何度も反復されているとは言えない。もし概念や思考の名として用いられるのが「愛」等の名詞と「愛の本質」等の名詞句に限られているならば我々が直面している問題は決して生じないであろう。しかし現実には「あなたに逢うためなら私なんでもするわ」といった発話（文）もそれらが真剣に発せられる時に発話者が抱く感情や思考を指する名として機能しうるのである。そしてこれらの発話（文）が、発話者自身の思考や感情の表現手段として用いれれると同時に、そうした思考や感情を指示する名としても用いられるところに、思考の反復と名の反復使用という異なる出来事が似通った現れを取る根源があるのである。例えばある者が手紙において「あなたに逢うためなら私なんでもするわ」という表現を五回も繰り返し用いたなら、そこで思考は反復されているのであり、それは思考の行き詰まりと思考者の能力の欠如を示唆している。他方ある者がエッセイにおいて「あなたに逢うためなら私なんでもするわ」的思考について論じるためにこの表現を五回使ったとしても、その度毎にこの思考の異なった側面を指摘したなら、そこには名の反復使用はあっても思考の反復はない。もし発話（文）を思考の名として使用する者が引用符「」の使用に関して厳格であったなら我々の問題は取るに足らないものであろう。しかし現実には文体上の理由から表現者はしばしば引用符の束縛を嫌い、例えば次のような表現をするのである。

あなたに逢うためなら私なんでもするわ。―愛の成長はこうした思考と両立しない。

ここで問題の発話は言わば見えない引用符によって思考の名へと転じられているのである。そしてこの見えない引用符の効用とは、あからさまな引用符を用いた場合より遙かに生き生きと当の思考を読者の眼前に呼び起こすことである。改めて確認するまでもなくこうした見えない引用符による発話の名への転化は『確実性』を含めた『探究』以降のウィトゲンシュタインのテキストにおいて極めて頻繁に観察される文体・技法である。

ここで我々の問題に立ち返るなら、あるテキストに類似の表現が繰り返し出現する場合、次の三つの可能性が考えられると言える。1）その表現によってテキスト製作者自身が自分の思考を表現し、従って思考が反復されている場合。2）その表現が思考の名として繰り返し用いられており、この使用そのものにおいては思考は反復されていないが、その名を含む表現全体で結果として同じ思考が反復して表現されている場合。3）その表現が思考の名として繰り返し用いられ、その名を含む表現全体によってそのたびに違った思考が表現されている場合。『確実性』第二部のようにあるスレッドが繰り返し活動し多くのシークェンスを生成する場合、そこではこの三つのいずれもが生起する可能性があると我々は考えねばならない。従って当面の問題は、『確実性』第二部で起こっているのがこのうちのいずれかということであり、それに対する答えは明らかに3）である、すなわち第二部においてスレッド β<誤りの限界>は繰り返し活動し、そこで類似の表現が思考の名として繰り返し用いられているが、結果として表現されているのはその都度違った思考なのである。こうした事態の詳細は第四章において示したい。

同一主題の異相　同一の思考の糸（スレッド）が繰り返しシークェンスを生成しながらも、そこで同じ思考が反復されることがないというこの事態を可能にしているのが同一主題が持つ多くの異なった姿としての異相である。そもそもある名が指し示す主題あるいは問題とは、それ自身を我々が一挙に把握することの不可能な実在である。それが我々に主題や問題として明瞭な輪郭をもって捉えられる時、すなわち言語的描写によって与えられる時、それは常にある一つの限定された姿あるいは相において我々の前に現れる。それが我々の前に顕しうる姿の数に限定はなく、また多くの姿の中で当の主題を最もよく体現するものが存在するわけではない。それらはすべて同一主題の異相なのであり、

主題とは無数の異なる相貌を持つ多面神的存在なのである。従って我々がある主題を名指すには二通りの仕方がある事になる。第一は何らかの名によって実在としての主題そのものを名指す場合であり、こうした名指しの多くはたまたまその主題が我々の前に最初に顕した姿の記述によってなされる。この場合主題に与えられた名はそれの印であり、象徴であり、その内実を正当に記述するものではない。第二は特定の姿でもって我々の前に現れる限りでの主題をその姿の記述によって名指す場合である。当然この場合名は体を表す。これら二種の名指しを区別し、実体としての主題そのものとある相の下で捉えられた限りでの主題を区別する必要が生じる場合、前者を単に主題と、後者をその主題の等価異相主題と呼びたい。スレッドとは主題が具体的思考者の中で存在する具体的様態であるから、この区別はスレッドにも適用され、必要な場合には、あるスレッドそのものと、特定の相で捉えられて限りでのそのスレッドを区別し、前者を単にスレッドと、後者をあるスレッドの等価異相スレッドと呼ぶこととする。

以上のことはそのまま＜誤りの限界＞という主題とスレッドβに当てはまる。第一部においてスレッドβは「誤りの限界」という相の下でウィトゲンシュタインと分析者たる我々に見出された。それゆえスレッドβとその核となる主題は＜誤りの限界＞という名で呼ばれたのであり、第一部において「誤りの限界」が我々に知られたスレッドβの唯一の姿であったから、主題とその異相の区別は問題とならなかったのである。しかしスレッドβを取り巻く状況は第二部に至って激変する。＜誤りの限界＞という内容無尽蔵な実体としての主題の様々な異なる姿を遍歴すること、これが第二部のウィトゲンシュタインの思考運動の本質であり、この運動に沿ってスレッドβ＜誤りの限界＞は観世音菩薩のごとくに次々と異相を顕すのであり、それが「固定され規範に転化された経験的命題」、「固定され世界像に転化された経験的命題」、「経験的判断ゲームの規則として機能している経験的命題」といった等価異相主題であり、これらがシークェンスⅠからⅦまでのウィトゲンシュタインの思考運動を導いているのである。

スレッドの派生　『確実性』第二部というテキスト全体をスレッドβ＜誤りの限界＞という単一の視点から見る時、その各部分は「誤りの論理的限界」という主題に関連するものと関連しないものに先ず大別される。この主題に関連しないテキストとは例えばシークェンスⅧのテキストであり、こうした場合我々はそこで働いているスレッドとしてスレッドδ＜知る＞のようにスレッドβ

とは異なる起源を持つものを想定しなければならない。他方この主題に関連があるテキストといってもそれらは均質ではない。この主題との関係の質によりそれらは更に二つに区分される。第一のグループはこの同一主題の異なる姿や側面に光を当てていると見做されるテキストであり、それらはすべてスレッドβの活動が生み出したものと見做しうる。後に詳述するが「世界像」、「規範に転化した経験命題」といった主題を巡るテキストはすべてこのグループに属する。第二のグループは、「誤りの論理的限界」という元の主題に関連しながらも、その異なる姿とは決して見做し得ない主題、例えば「誤りの論理的限界の無根拠性」とか「誤りの論理的限界の起源」といった主題に関するものである。この場合二つの可能性が考えられる。第一は「無根拠性」や「起源」といったより普遍的で独立した主題を巡り活動する思考の糸（スレッド）がβとは独立に存在し、問題となっているテキストはそれらの独立したスレッドとスレッドβの交差から生み出されたものである場合。第二はこれらの主題は「誤りの論理的限界」という元の主題から属格の論理を経由して派生したものであり、当該のテキストはそうした派生主題に対応する派生スレッドにより生み出されたものである場合。『確実性』第二部がどちらの場合に属するかは、「無根拠性」、「起源」といった主題そのものに関するより抽象的で独立した思考が『確実性』第一部あるいは第二部で展開されているかどうかに依存するが、事実としてそのような思考の展開が存在しないということが、スレッドβ'<限界の無根拠性>とスレッドβ''<限界の起源>という派生スレッドの存在と活動を第二部で我々が想定する理由である。

スレッドβ'とスレッドβ''　今述べたように第二部で初めて登場するスレッドβ'<限界の無根拠性>とスレッドβ''<限界の起源>という二つの思考の糸はスレッドβ<誤りの限界>から派生したものである。これらの派生スレッドの内実はそれらが生み出したシークェンスの分析を通じてのみなされうるから、それは第四章の論述に譲る。

スレッドδ　スレッドδは第二部シークェンスⅧの思考をスレッドαと共に支配している。図1が示すように第一部の分析で我々はスレッドδの核となる主題を「心的状態という概念の批判」であるとした。しかし第二部シークェンスⅧの分析はこのスレッドの主題を「知る」とするのがより適切であることを示している。従って、第一部以来持続しているスレッドδの同一性には何の

変化も無いが、今後それを「知る」という主題を擁するものとして捉えることにする。この問題は第四章のシークェンスVIIIの分析において再度取り上げる。この「知る」という主題を巡り思考が展開されているシークェンスVIIIは第二部の本体に当たるシークェンスⅠからVIIまでの思考と切り離された独立性を持つものである。しかしそれはシークェンスVIIIの思考が第二部の他の部分から島の如くに孤立し、ある意味で第二部の外部に位置する事を意味するのではない。スレッドδとシークェンスVIIIは第二部全体と分かちがたく一体となっているのであるが、その詳細については第四章で論じる。

スレッドε　スレッドε＜実践の変化＞は第二部においてシークェンスIIの一部においてスレッドβと協働して出現するのみであり、第二部の思考全体の中で重要な位置を占めるものではない。このスレッドをスレッドβとは独立のスレッドと認定し、例えば、「スレッドβ‴＜限界の変化＞」の様にスレッドβから派生したものと捉えなかったのは、第一部シークェンスXにおいて「言語ゲームと言葉の意味の変化」という相の下でこの主題が出現し、そこで「限界」という概念とは全く独立に「実践の変化」という主題を巡る思考がすでに展開されていたからである。それゆえ第二部シークェンスIIで「固定された経験的命題の変化」という主題を巡って思考が展開される背後に、より一般的な「実践の変化」という主題の存在を認め、その起源を第一部シークェンスXに求めたのであり、このように連綿と連なる思考の糸（スレッド）にスレッドεという名を与えたのである。

スレッドξ　スレッドの派生に関する上の考察において我々は、第二部のテキストが＜誤りの限界＞という支配的主題と関連するものとしないものに大別されると述べた。こうした分類が最も困難なのがシークェンスIXである。そこで出現するのが「体系の相対性」という異相主題を持つスレッドであることは明白である。問題はこのスレッドとスレッドβ＜誤りの限界＞及びその派生スレッドの関係であり、とりわけ問題なのが派生スレッドβ′＜限界の無根拠性＞との関係である。もしこのスレッドがスレッドβ′＜限界の無根拠性＞に対して派生的関係を持つのであれば、このスレッドは結局スレッドβから派生するスレッドの一つということになる。その場合『確実性』第二部の思考は極めて高い内的一貫性と閉鎖性を持つことになるだろう。すなわちスレッドδに支配されてるシークェンスVIIIを除く第二部の全体が＜誤りの限界＞という単一の主題

から派生し導出される思考で埋め尽くされていることになる。そしてスレッドδ自身は第二部に起源を持つものでなく、第一部からの繰越主題であるから、第二部で生起し、提起された問題と緊張はすべて第二部において解消されていることになる。言い換えるならばもしこのシークェンスⅨを支配するのがスレッドβの派生スレッドであるなら、『確実性』第二部が終結した段階で、そこまでで展開された思考を更に継続させるポテンシャルはほとんど存在していないことになる。従って『確実性』第二部までと第三部以降は異質な連続性の無いテキストである可能性が出てくるのである。他方このスレッドがスレッドβから独立したものであるなら、このスレッドの存在自体が思考の解かれざる緊張の明瞭な指標となるであろう。なぜならば＜体系の相対性＞という主題が＜限界の無根拠性＞と全く無関係なものでシークェンスⅨが実質的に第二部の外部に属していることはおよそ考えられないからである。明らかにこれら二つの主題に重要な関係が存在する。にもかかわらずそれらが独立したスレッドを形成しているのなら、それら相互の関係そのものが第二部の終結部においては解明されざる不透明部分として残留するということであり、この不透明さこそが第二部の思考を第三部へと展開する原動力となるはずなのである。

我々がシークェンスⅨを支配するスレッドをスレッドξと名付けたということは、我々が最終的に後者の結論を選択したということを意味している。いかなる理由によりそうした選択がさなれるべきであるのか、第二部が内包し残留させる緊張と問題とはなになのか、こうした問題を扱うのは、第四章のシークェンスⅣの分析において「体系の論理」と「実践の論理」という概念が登場するのを待たなければならない。

3．『確実性』第二部の各シークェンスの一体性と区切り

本節の考察に入る前に図3について簡単に説明したい。図3として次に示すのは第二部のサブシークェンス・スレッド図であり、これは本章並びに次章の考察にとって最も重要な基礎資料となるものである。

＜図3　『確実性』第二部のサブシークェンス・スレッド図＞

シークェンス	サブシークェンスとその内容	サブシークェンスに登場するスレッドとスレッドβの異相						
		α	β	β'	β''	δ	ε	ξ
	a (66-70) 誤りの限界という概念		β[誤りの限界]					

I 誤りの論理的限界	a′(71-75) 誤りの論理的限界の存在	β[誤りの限界]
	(76) [メタ哲学]	「私の目的は、ここで言いたくなるが無意味な命題を示す事である。」
	a″(77-78) 計算の誤りの論理的限界	β[誤りの限界] (β′) 78
	a‴ (79-83) 誤りの限界と経験的テストと理解の関係	β[誤りの限界]
II 固定化された経験命題としてのムーア命題	a (84-86) ムーア命題の特徴	α
	b (87-88) 探究と行動の原理として機能する経験命題	β[探究の原理]
	c (89) ムーア命題の実践的不可疑性と無根拠性	β′
	d (90-91) ムーア命題と知の切り離し	α　δ
	b′(92-95) 世界像命題としてのムーア命題	α　β[世界像命題]　β′
	b″(96-99) 規範として固定された経験命題の変化	β[固定化命題]　ε
III 確信の体系としてのムーア命題	a (100-105) 確信の体系としてのムーア命題	α　β[確信の体系]　(ξ) 105
	a′(106-108) 確信の体系の受動的起源	β[確信の体系]　β′　β″　(ξ) 108
IV 疑いの限界としてのムーア命題の無根拠性	a (109-112) 経験的根拠付けの限界としてのムーア命題	α　β′
	b (113-116) 疑いの言語ゲームとムーア確実性	
	a′(117-120) ムーア命題の不可疑性の超経験性	β[疑いの限界]　β′
	b′(121-123) 疑いの言語ゲーム	(δ) 121
V 判断ゲームの原理としてのムーア命題	a (124-129) 判断ゲームの原理として機能する経験命題	β[判断ゲームの原理]
	a′(130-135) そうした命題の根拠が経験ではないこと	β [判断ゲームの原理　β′　(ξ) 132
	a″ (136-140) 判断ゲームの規範となる判断例としてのムーア命題	α　β[判断ゲームの原理]
	a (141-144) 信念体系の受動的起源とその固定部のレリーフ的生起	β[信念の固定部]　β″

VI 経験命題の固定化の起源	b (145-151) 判断ゲームの出発点として固定された経験命題としてのムーア命題	α 151	β[判断ゲームの原理]	β′ 145	δ 151	
	a′(152-153) 信念体系の固定部のレリーフ的生起		β[信念の固定部]	β″		
VII 限界の受動的起源と無根拠性	a (154-158) 疑い・誤り・被理解の限界としてのムーア命題	α	β[誤りの限界]			
	b (159-162a) 原初的信の受動性			β″		
	c (162b-164) 探究の根本前提自身は経験的テストの限界である事		β[探究の原理]	β′		
	d (165-166) 信念の受動的起源と無根拠性			β′ 160	β″ 165	
	e (167-174) 限界は受動的な原初的信により形成され無根拠である事	α	β[限界としての固定部]	β′	β″	
VIII 「私は・・・と知っている」の意味とムーアの用法	a (175-177)「私は・・・と知っている」の意味				δ	
	b (178) ムーアの「私は・・・と知っている」の誤用	α			δ	
	a′(179-180)「私は・・・と知っている」と「私は・・・と信じている」の区別				δ	
	b′(181) ムーア言明の遂行的再解釈	α				
IX 体系の相対性と真理概念の体系内性	a (182-188) 疑いの限界としての証拠の体系の相対性 [思考の標本] 183、186、187		β[疑いの限界] β[証拠の体系]			ξ
	a′(189-192) 真理概念の体系内性と「事実との一致」の否定		β[証拠の体系]			ξ

このサブシークェンス・スレッド図は第二部の各シークェンスについて、それを構成する各サブシークェンスの思考がどのスレッドの活動によりもたらされたかを示すものであり図2の見取り図をより詳細にしたものである。この図によって提示される情報に相当するものを我々は第一部でシークェンス表とスレッド展開図という二つの手段によって表した[2]。第二部の分析でこうして一挙

に示しているものを第一部の分析では二段階に分けて示したのである。分析結果の提示法に関するこうした第一部と第二部の相違はそれぞれの分析においてなすべき作業の相違を反映したものであり、我々の分析が既に出来上がった公式を各対象に機械的に適用するいったものではありえないことの反映である。第一部の分析において最も重要な作業はそこにどのような思考の糸(スレッド)が存在し、それらによって第一部の思考とテキストがどのように生成されているのかを明らかにすることであった。いうまでもなくこうしたスレッドは事前に我々から完全に隠されており、そのリストが何らかの形で与えられているというものではない。それの発見は、先ず第一部のテキストをすべての可視的手がかりを動員しシークェンスへと分割し、更に各シークェンスをサブシークェンスへと分割することから始めなければならなかった。こうした分析の結果を示すのがシークェンス表である。シークェンス表において初めてスレッドが垣間見られるのであり、それらスレッドの痕跡を各シークェンスごとに繋いでゆくことによりスレッドの展開と合流の様が姿を現したのであった。そうした分析の結果を示すのがスレッドの展開図である。第一部の分析結果の提示法はこうした発見過程に対応するものである。発見されるべきものが当初は完全に隠されていたがゆえに、結果として発見されたものをこうした方法によらずして提示することはその本質の理解を妨げざるをえないのである。他方第二部の分析においてスレッドそのものは最早隠されていない。そこに登場するスレッドは第一部に存在したスレッドか、それらと何らかの関係をもったものでなければならないからである。発見すべきなのはそうしたスレッドがどのような活動を通じて『確実性』第二部という全体に固有の一体性・完結性をもたらしているかであり、それを見出すためには本章の図2や図3のようにスレッドとシークェンスの関わりを一挙に示す所から分析を始めなければならないのである。

シークェンスの一体性の多様性　本章の目的は第二部の九つのシークェンスのそれぞれがどのような一体性を持つがゆえにシークェンスとして認められるのかを示すことである。我々に与えられたウィトゲンシュタインのテキストにシークェンスとシークェンスの区切りを示す可視的な目印は原則的に存在しないから、小節の連鎖として存在するテキストから各シークェンスの一体性を読み取ることはシークェンスとシークェンスの区切りを見出す作業と表裏一体のものである。そして連続する小節群にある一体性を与え一つのシークェンスとするのも、小節群と小節群を別のシークェンスとして分離するのも、すべては複数の思考の糸（スレッド）の活動の持続と停止の絡み合いがもたらすもので

あるから、各シークェンスの一体性を把握し、その区切りの妥当性を確認すためには、図3を各サブシークェンスにどのスレッドが出現しているかに注目しながら注意深く読むことから始めなければならない。こうした読みから、例えばシークェンスⅠの様に自ずから浮かび上がってくる明瞭な一体性を持つシークェンスがいくつか存在する一方で、他のシークェンス、例えばシークェンスⅣはそれほど明瞭な一体性を持つわけではないことが読み取れるであろう。このようにウィトゲンシュタインのテキストに現れるシークェンスの一体性は均質ではなく、かかる多様性は各シークェンスが思考運動の中で果たす戦略的役割の相違を反映していると考えられる。『確実性』第二部に限定するならそこに現れるシークェンスの一体性は主題的一体性、内的一体性、緩やかな一体性、融合的一体性の四種に分類することができる。

主題的一体性　シークェンスが持つ主題的一体性とはシークェンス全体が単一の主題を巡る思考の軌跡であることによって生ずる一体性である。シークェンスを構成するサブシークェンスのすべて、もしくは大半が単一の主題を巡る思考を表現している時、そのシークェンスには主題的一体性が認められ、この主題的一体性によりそれはシークェンスとして存在することになる。ウィトゲンシュタインのテキストを分析する者にとって主題的一体性は最も見えやすい一体性であり、何の目印も無い小節の連続として存在するテキストからシークェンスを切り出す際に最初に手がかりとすべきものである。シークェンスがこうした主題的一体性により存在する時、そのシークェンスの区切りは必然的に当の主題の消滅、しかも一時的ではない消滅によって示されることになる。例えば第二部シークェンスⅠ（§§66-83）を構成する四つのサブシークェンスはすべて「誤りの限界」という主題を巡る思考から成り立っているが、それに続くサブシークェンスからこの主題は全く消滅する。このことによって我々は§83と§84の間にシークェンスの区切りが存在することを認識し、同時に§§66-83という小節の連続をシークェンスⅠというシークェンスとして認めることができるのである。こうした観点から図3を再度通覧するなら、第二部ではⅠ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷ、Ⅸの六つのシークェンスが主題的一体性によりシークェンスとして存在していることと、それぞれに一体性を与えている主題がなにであるかを読み取ることは比較的容易であろう。

このように主題的一体性によって存在しているシークェンスはウィトゲンシュタインのテキスト分析者にとって最も発見しやすいものであるが、それらのシークェンスが決して思考運動の単位ではないことを改めて確認しておく必

要がある。思考運動の単位とはその内に問題の提示とその解決の双方を含んだ存在であり、テキストの場合それは始りと終結を含む完結した思考運動を表現するものでなければならない。単に同じ主題についての思考を表現している一連のテキストは思考運動の始りと終結を内包する単位ではない。一般に主題的一体性を持つウィトゲンシュタインの連続したテキストは、同一主題に関わる多様な、あるいは多次元的な思考を積み重ねてゆく過程であるが、問いとその答えを同時に含むグローバルな起－結構造を持つものではない。それゆえ主題的一体性がいかに最も目立つものであるとはいえ、それにばかり注目している限りウィトゲンシュタインの思考運動の姿を見ることはできない。その時分析者はコマ落としのフィルムを観ているかのような体験をせざるをえないだろう。それゆえ問いと答えの起－結構造を骨格とするウィトゲンシュタインの思考の運動を見る鍵は主題的一体性としては現れない部分にあるのであり、一見するとまとまりの無い部分やまとまりには寄与していないかに見える部分に思考運動の真のまとまりを見出す鍵が存在するのである。この「まとまり」については第五章で更に詳しく論じる。

不可視のシークェンスとウィトゲンシュタインの思考の根源的リズム　主題的一体性は可視的一体性である。図3においてそれは同一スレッドの矢印の連鎖として文字通り見ることができる。図3でシークェンスⅠ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅸの一体性は同一スレッドの持続的出現を通じて見ることができるのである。それに対して図3でシークェンスⅡ、Ⅳ、Ⅶのそれぞれを持続的に貫くスレッドは存在せず、それらの一体性を見ることはできない。次章で明らかになるようにシークェンスⅡの持つ一体性が内的一体性でありシークェンスⅣの持つ一体性が緩やかな一体性であり、シークェンスⅦの一体性が融合的一体性なのだが、それらはいずれも図3で見えないという意味で不可視の一体性である。それらがいかなる一体性であり、どのように異なるのかについては次章で論じるとして、それらの一体性が不可視であるということによって一つの問題が生じる。それは不可視の一体性の存在をそもそもどのように知るのかという問題であり、それは不可視の一体性によりシークェンスとして存在するシークェンスの区切りと存在をどのようにして知るのかという問題として我々の前に立ち現れる。シークェンスⅣを例にとってみよう。図3のスレッドの矢印の配置を見るだけではこのシークェンスがどのような一体性を持つのか、あるいはそもそもシークェンスとしての一体性を持つのかどうかを窺い知ることは困難である。そうしたことはそこには現れないテキストのより具体的で細かな表現と表

情を観察しなければ知ることはできない。しかしながらこうした観察やそれに基づく考察は真剣に繰り返し行ってこそ見えないものを見えるようにすることができるのだが、そうした真剣で度重なる観察と考察はそこに一体のシークェンスが現実に存在することを知る、あるいは確信する者にのみ可能である。シークェンスの存在を知るためにはその一体性を知らなければならない、ところがその一体性はシークェンスの内部を詳細に観察してはじめて把握される、しかしこうした観察は目の前にシークェンスが存在することを知らなければ真剣に行えない、・・・、ここには未知なるものの発見に常につきまとう循環の迷路が存在する。この循環をどこかで断ち切らない限りウィトゲンシュタインのテキストは解きがたいパズルという姿を変化させることはない。もちろんウィトゲンシュタインのテキストと思考という謎に対して常に適用可能な公式的な循環切断法の存在をここで想定することはできない。それはウィトゲンシュタインの思考は畢竟謎ではないと想定することに他ならないから。しかしながら我々が当面する『確実性』第二部という謎に関する限り、問題の循環にある切れ目を入れることのできるナイフが存在するのである。それが「前後のシークェンスによる区切り」というナイフであり、その背後にはウィトゲンシュタインの思考の根源的リズムというより本質的事象が横たわっている。図4によってこの事象を説明しよう。図4は第二部の九つのシークェンスの一体性の種類を示すとともに、可視的な主題的一体性を持つシークェンスを実線枠で囲ったものである。

＜図4　『確実性』第二部の各シークェンスの一体性と区切り＞

シークェンス	シークェンスの一体性の種類	シークェンスの可視・不可視
I	主題的一体性［誤りの限界］	可視
II	内的一体性	不可視
III	主題的一体性［確信の体系］	可視
IV	緩やかな一体性不可視	不可視
V	主題的一体性［判断ゲームの原理］	可視
VI	主題的一体性［ムーア確実性の起源］	可視
VII	融合的一体性	不可視
VIII	主題的一体性［知る］	可視
IX	主題的一体性［体系の相対性］	可視

この図から、『確実性』第二部において不可視のシークェンスがその前後を可視的シークェンスにより区切られることによって自らの姿を無言のうちに示している様が読み取れる。例えばシークェンスIIはその前後をシークェンスIの終点とシークェンスIIIの起点により区切られており、そのことにより姿を浮かび上がらせている。シークェンスIV、VIIについても同様である。このようにそれ自身は見えないシークェンスが一種陰画的存在として浮かび上がるという事態がここで可能となっているのは、主題的一体性をもつ可視的なシークェンスが途切れることなく連続して現れるのでなく、現れては消え、消えては現れるということを繰り返しながら存在し続けているからである。こうした連続的出没過程で可視的シークェンスが姿を消している間そこには思考の空白があるのではなく、可視的シークェンスとは異なった思考の在り方としての不可視のシークェンスが存在しているのである。このように『確実性』第二部の思考とテキストは可視的シークェンスと不可視のシークェンスという異なった在り方のシークェンスの交替によって生み出されるリズムによって刻まれ、刻まれつつ生み出されていると言うことができるのである。そしてこのシークェンスのリズムは、それを生み出す思考のリズムの反映であると考えられる。主題的一体性を持つ可視的シークェンスを生み出す思考の在り方を可視的思考と、主題的一体性とは異なる一体性を持つシークェンスを生み出す思考の在り方を不可視的思考と呼ぶならば、第二部のテキストについて今我々が観察しているリズムは、可視的思考と不可視的思考の交替が生み出す思考のリズムなのである。

ウィトゲンシュタインの思考のリズムについては前稿で既に異なった主題の交替が生み出すリズムについて言及した。それは異なった思考の糸(スレッド)の交替が産出するリズムであり、サブシークェンスの生成を支配するリズムであり、小節の連続と断絶をもたらす最も直接的な思考のリズムである。それはテキストにおける主題の交替を支配する原理であり、主題のリズム、主題の拍動であった。それに対して今問題としているリズムは、可視的思考と不可視的思考という思考様態の交替が生み出すリズムであり、それが生み出すのは異質のシークェンス（群）の交替である。その拍動はより長くより深くより捉えにくいものである。それはウィトゲンシュタインの思考のより根源的なリズムであると言うことができるだろう。この根源的なリズムを思考様態のリズムと、先のより直接的なリズムを思考主題のリズムと呼ぼう。我々のこれまでの考察は、ウィトゲンシュタインのテキストの複雑な様相は思考主題のリズムと思考様態のリズムという二つの周期の重なり合いにより生み出されたものであるこ

とを示唆している。

4．『確実性』第二部の各シークェンスの内部構造と相互関係

本章では『確実性』第二部の九つのシークェンスのそれぞれについて内部構造とそれら相互の関係について論じる。広い意味で「シークェンス相互の関係」と言う時、厳密な意味でのシークェンスとシークェンスの関係と、あるシークェンスのある部分（例えばある小節）と別のシークェンスのある部分（例えばある小節）の関係のいずれもが意味される可能性があるが、本節ではその双方を考察の対象とする。それゆえ混乱を避けるためにあるシークェンス全体と別のシークェンス全体の関係をシークェンス同士の関係と、あるシークェンスのある部分と別のシークェンスのある部分の関係をシークェンスを超えた部分間の関係と、それら両者を含めたウィトゲンシュタインのテキストの部分間の関係全体をテキスト間の関係と呼ぶことにしよう。これらの呼称と区別を前提とした上で、本章の具体的分析に入る前にウィトゲンシュタインのテキストの間にそもそもどのような種類の関係が存在し、それらがどのように見出されるのかについて述べておきたい。それは各シークェンスの内部構造の考察に当たってどのような点に注目すべきかを確認しておくためである。

前節で我々はシークェンスの一体性を可視的一体性と不可視的一体性に分けた。シークェンスの一体性とはあるシークェンスの部分間の結合様式であるから、これはシークェンスの部分間の結合様式に可視的結合と不可視的結合があることを意味する。可視的結合とはシークェンスの諸部分が同一の主題を共有し同一のスレッドにより生成されることによる結合様式であり、不可視的結合とはそうした同一スレッドの媒介によらない結合様式である。かかる観点からすれば、可視的結合とは主題的結合であり、不可視的結合とは非主題的結合であると言うことができるだろう。この区分はあらゆるレベルのテキスト間の結合様式に適用できる。すなわちウィトゲンシュタインのあるテキスト（それがどのような大きさのものであれ）と別のテキストの間に何らかの結合関係が存在する時、その結合様式は主題的結合か非主題的結合のいずれかに分類されるのである。そして今考察の対象をシークェンスとその部分に限定するなら、理論的には我々が考察すべきウィトゲンシュタインのテキスト間の結合関係は次の六種類があることになる。

1）同一シークェンスの部分間の主題的結合（＝可視的一体性）

2）シークェンス同士の主題的結合
3）シークェンスを超えた部分間の主題的結合
4）同一シークェンスの部分間の非主題的結合（＝不可視的一体性）
5）シークェンス同士の非主題的結合
6）シークェンスを超えた部分間の非主題的結合

1）から3）の三つの結合関係はあるテキストと別のテキストが同じ主題を共有することによるものであり、ウィトゲンシュタインのテキストを生成する思考の糸がどのように発生、持続、展開、変遷してゆくのかを示すものである。それはウィトゲンシュタインのテキストという有機体の最も基礎的な結合組織であり、その骨格と言うべきものである。それに対して4）から6）はより多様で微細な結合関係であり、より見出しにくいものである。しかしこれらの結合関係こそが複数のスレッドによって生み出され、複数の主題を持つテキストを一つの全体へと結び合わせているのである。以下各シークェンスについてその内部構造と相互関係を考察する。

シークェンスⅠ　図3からも明らかなようにシークェンスⅠはスレッドβ［誤りの限界］に基づいた主題的一体性を持つ。従ってこのシークェンスの内部構造と他のシークェンスとの関係を明らかにするとは、一方で1）スレッドβ［誤りの限界］がどこに由来し、このシークェンスでどのように展開し、他のどのシークェンスにどのように受け継がれてゆくのかを明らかにし、同時に2）このシークェンス内部とシークェンスを超えた非主題的結合にどのようなものがあるのかを明らかにすることである。

既に述べたようにこのシークェンスで「誤りの限界」という相の下で登場するスレッドβは今後様々に姿を変えながら第二部の思考全体を支配し続けてゆく。従ってこの思考の糸が具体的に第一部のどこから受け継がれたものかを確認することは、第二部の思考がその始りにおいてどのような水準にあったのか、そして第二部の活動を通じてそれにどれだけのものが加わってゆくのかを明確にする上で重要である。こうした観点から第二部のスレッドβの直接の起源を第一部の中に探すなら、それが第一部シークェンスⅨであることはこのシークェンスが第一部の結論部であり、スレッドαとβの最終的な合流地点であることから明白であろう。更にスレッドβとして第一部から第二部へと受け継がれた具体的内容を考えるなら、次に引用する§51が第二部シークェンスⅠの

直接の先行者として最もふさわしいと考えられる。

> 「だってこれについての誤りって一体どんなものなんだい！」、これはどのような種類の命題か。それは論理的命題でなければならない。しかしそれは用いられない論理である。というのもそれが教えることは命題によって教えられるのではないから。—それは論理的命題である。というのもそれは概念的（言語的）状況を記述しているのだから。(§51)

「だってこれについての誤りって一体どんなものなんだい！（Wie sähe denn hier ein Fehler aus!)」という発話はここで名として用いられている。その名によってウィトゲンシュタインが指し示そうとしているものは、この発話を真剣に発する者がそれによって表現しようとする確実性であり、「これについて」と言われる「これ」とはこの文脈では「ここに手がある」というムーア命題が表す事態である。つまりこの発話を名として用いウィトゲンシュタインが指し示そうとしているのは「ここに手がある」というムーア命題が持つ特別な確実性であり、それについて誤りや疑いというものが考えられないという意味でのその限界性である。この確実性、限界性、を我々はムーア確実性と呼ぶこととした。従って§51の思考が伝えようとしているのは、先ず、この確実性・限界性がそれについて現実にどの人間も誤らないという意味での経験的・心理的確実性ではなく、それに関する誤りが「論理」や「言語ゲームの規則」と呼ばれるある規範の侵犯と見做されるという意味での論理的確実性だということである。そして「それは用いられない論理である」ということによってこの思考が表明しようとしているのは、それについての誤りが規範の侵犯であるにもかかわらず、その規範は明示的に言葉で述べられた規則によっては表現されないものである、ということである。言葉によっては規定されない論理的確実性（限界性）としてのムーア確実性（＝ムーア命題が持つ確実性)、これが第一部の思考が第二部の思考へと手渡す主題であり思考の糸（スレッド β）の内実である。この確実性の本性と起源を探究することが第二部の思考の目的であることはここですでに読み取れるのである。

こうした観点から第二部シークェンスⅠを再度通覧すると、そこで扱われ展開されているのはこうして受け継がれた主題のごく限られた一面であることが分かるだろう。そしてこの限られているということ、このシークェンスの持つある種の控えめさが、それが第二部の中で占める戦略的位置を示唆しているのである。シークェンスⅠ冒頭のサブシークェンスａ（§§66-70）とそれに続くａ′

（§§71-75）では第一部において到達された「誤りの論理的限界」という概念が改めて構成・提示される。その際この同一概念、同一主題の前出箇所である第一部のテキストや思考に対する「・・・で考察した・・・の問題は・・・」といった前文参照的表現は一切用いられず、あたかも新たな問題が新たに考察されるかのようないでたちで第二部のテキストは開始される。こうした外見上の独立性はそこで用いられる例が第一部シークェンスIXでの「手」に関するものから、自分自身の住所や年齢の知識に関するものに入れ代わっていることにより強化されている。そのため第二部を読み進めてゆく時、そこで展開されようとしている思考と第一部の思考の密接な関連は（実在するにもかかわらず）直ちに見えてこないのである。ここに我々はウィトゲンシュタインの思考とテキストの一つの特徴的スタイルを認めることができる。そのスタイルとは接続表現の不使用とテキスト各部の見かけ上の相互独立性である。文体的に相互に独立した小節を連ねてゆくという『論考』以来のウィトゲンシュタインのテキストの成り立ちはこのスタイルの生み出したものなのである。思考運動の方向と速度の自由を最大限確保する手段と考えられるこのスタイルは、ウィトゲンシュタインのテキストが我々に対して謎として現れる大きな理由の一つである。『論考』においてテキスト各部の見かけ上の独立性は「5.212」といった独自のナンバリングによって相殺されていたが、いわゆる後期のテキストにおいてそれはよりむき出しのものとなり、テキストの謎めいた外観はより強まるのである。

ウィトゲンシュタインのテキスト各部分のこの見かけ上の相互独立性は、ウィトゲンシュタインの思考が常にあらゆる方向に動きうる絶対自由を持っているかのように思わせる。しかしこのテキストの独立性も思考の絶対自由も見かけ上のものでしかない。この見かけ上の独立性と自由を本当のものと思い、ウィトゲンシュタインのテキストを謎めいたアフォリズムの集積の如きものと解釈することは、ウィトゲンシュタインのテキストを理解しようとする者が最も陥りやすい、そして最も重大な誤りである。『確実性』第二部シークェンスＩに立ち戻るなら、その冒頭の二つのサブシークェンス（§§66-75）は見かけ上の独立性に反して、第一部の「誤りの論理的限界」という主題を忠実に受け継いでいる。その際に用いられる例は第一部の自己の手の存在から自己の住所と年齢へと変化しているが、それらは共に自己にとってムーア確実性を持ち、誤りと疑いの限界を画するべきものであり、ウィトゲンシュタインがそれについて語ろうとしている事柄には何の変化も無いのである。この新しい例を用いて

ウィトゲンシュタインは、それらムーア確実性を持つ事実が歴史的事件の年号といった他の事実と根本的に異なった概念的・論理的役割を担っていることを示そうとする。すなわちある年号についてどれほど確信があろうとも権威ある歴史書にそれと異なる記述があれば我々は自分の誤りを認めるであろうが、自分が今どこに住んでいるのかについて自分が誤っていることは考えられないという点で後者の事実は特異なのである（§§66-67)。そしてこの特異さは、それについての誤りが心理的・生理的にありえないという自然的な特異さではなく、それについての誤りは我々の誤りの概念から既に逸脱しているという概念的・論理的特異さなのであり、それゆえ「問題は、ここで論理学者なら何というべきか」なのである（§68)。この論理的特異さは誤りと精神障害の区別という指標によっても我々の言語の中に登録されている。すなわちある人が自分の今住んでいる場所について根本的に誤認しているなら、我々はそれを「誤り」ではなく「おそらくは一時的な精神障害」と呼ぶであろうが（§§71,73)、それはこの事実が誤りの論理的限界であることを示しているのである。

このように第二部シークェンスⅠ冒頭の二つのサブシークェンスの思考は「誤りの論理的限界」という概念を改めて提示し、それが我々の言語実践の中に実在することを示すのであるが、その際第一部の思考が単に異なる言葉によって反復されるのではなく、異なる例を用いることと誤りと精神障害の区別という新たな指標を持ち出すことにより、思考が反復されることなく同一の思考の糸の活動が反復されるのであり、ここにウィトゲンシュタインの思考のもう一つの独特のスタイルを認めることができる。

§76のメタ哲学的言明をはさんで続くサブシークェンスa″（§§77-78）は「計算の確実性」という第一部シークェンスⅧ（§§43-50）の思考の素材を再度取り上げ、我々の「確実な計算」という概念が「誤りの限界」を示す論理的概念であることを示唆する。ここで注目すべきは、シークェンスⅠでは明確な形では姿を現さない「限界の無根拠性」という主題、すなわちスレッドβ'の存在が§78で先行的にほのめかされていることである。§77で「検算を20回やっても2回の場合より計算が確実になるわけではない」という我々の判断が検討されるが、この判断は「2回検算をした計算は確実であり、通常の状況ではそこで誤りは考えられない」という限界概念を内包している。これについて§78は「そして20回の検算が2回の検算より確実ではないということの根拠を私は挙げられるのか」という問いを発する。これはある事柄を誤りの論理的限界として認定する（「・・・について誤りは考えられない」といった形をとった）我々の具体的判

断の根拠を問う問いであり、ここでこの問いは発せられるのみで答えが求められることはない。しかし当然この問いの彼方には「根拠はない」という答えが存在しているのであり、その答えを様々な道筋により追い求めようとするのが「限界の無根拠性」という主題、すなわちスレッド β' に他ならない。ここで未だ表立っては存在しない思考の糸と主題が非明示的、非主題的にほのめかされ示されているのである。このように未だ存在しない主題と思考の糸を（多くの場合）非明示的・非主題的に示すというのもウィトゲンシュタインの思考固有のスタイルであり未在の主題の非明示的先行的予示と呼ぶべきものである。未在の主題の先行的予示の特徴は、そこで瞬間的に先行的に出現する思考がその後継続されず、そのテキストが後続するテキストから孤立している様に見えるということである。例えば§78の問いは答えられることなく§79ではその問いと直接関係の無い事柄について思考が進行する。§78の問いが「限界の無根拠性」という主題の先行的予示であったというのは、シークェンスIIにおいてその主題がはっきりと姿を現した時初めてわかることであり、読者が最初に§78を通過する時その見かけ上の孤立性はウィトゲンシュタインのテキストの無秩序さという印象を強化せざるを得ない。このように未在の主題の非明示的先行的予示はウィトゲンシュタインのテキストを読む上で大きな困難をもたらすものである。しかし新たな思考の創造というものが単に既存の主題の新たなる展開ではなく新たな主題の出現と不可分であるならば、そして真に新たなものが突然一挙に生成出現することがありえないとすれば、未在の主題の非明示的先行的予示、あるいはその等価物は真に創造的思考には不可欠なスタイルであると言わねばならない。ウィトゲンシュタインの思考において新たな主題が出現する多くの場合、それは繰り返し非主題的に予示され、その後に忽然と姿を顕す。図3において（）で囲まれた矢印は未在の主題の非主題的予示を示している。

続くサブシークェンス a‴（§§79-83）は「誤りの論理的限界」という主題を更に展開・拡張し、ここに至って初めて第二部の思考は第一部では見られなかった新しい内容を生成・通過するといってよい。ここで新たに生み出される思考は「誤りの論理的限界」という主題（概念）と「命題の経験的テスト」と「命題の意味の理解」という二つの概念の関係である。「誤りの論理的限界」と「命題の経験的テスト」の関係をその根底まで辿ってゆくと思考は「誤りの論理的限界は同時に経験的テストの限界でもある」という事態に行き着くのであり、それは「限界の無根拠性」という主題の完全な展開と軌を一にした思考に他ならない。それに対して§§79、82では両者の関係がより遠回りに探られているに

すぎず、そこで述べられているのは「何がある言明の十分なテストと見做されるかは論理に属する、それは言語ゲームの記述に属する」(§82) ということに留まり、「経験的テストの論理的限界」というものには未だ触れられていない。従ってここでスレッド β' が予示されていると言うことはできない。

シークェンスⅠの最後の小節§83も一種の先行予示的テキストである。「一定の経験命題の真理は我々の基準体系に属する」というこの小節はムーア命題の真理が我々の言語ゲームの中で特異な役割を果たしている事を巡るサブシークェンス a‴ の思考全体と無縁な訳ではない。しかしその明瞭で断定的な口調と「基準体系 Bezugssystem」という新たな表現の説明抜きの使用によりこの小節はサブシークェンスの他のテキストから飛躍し孤立している感を否めない。シークェンスⅡのサブシークェンス b (§§87-88) において「探究と行動の原理」という言葉がムーア命題の特異な論理的地位を表すものとして主題的に提示される時、読者は§83が「探究と行動の原理」という「誤りの限界」の等価異相主題の先行的予示であったことを認識するのである。

以上で我々はシークェンスⅠの主題的な内部的関係と外部関係の考察を終える。我々に残っているのはシークェンスⅠが内包する非主題的な関係の考察である。一般にあるテキストが内包する非主題的関係は無尽蔵であると考えられる。何故なら非主題的関係とは明示的に示された主題の存在には依存しないから、単にそこで述べられた内容のみならず、用いられた用語、文体、書体、語り口、等を介して存在するものであり、どのような分析によりそれを尽くせるかを判断することができないからである。それはテキスト製作者の思考が自らの過去と未来のすべての思考とあらゆる様態と形態において持ちうる結びつきの総体であり、その全貌は思考者自身の意識にも分析者の意識にも明らかにならない、あるいは明らかになったとしても明らかになったと判別することの不可能なものなのである。それゆえここでは我々の目にとまり、語るべきと思われたシークェンスⅠが内包する二つの非主題的関係についてのみ述べたい。

第一は既に触れた§68の問いが『確実性』第二部全体と持つ関係である。§68の全体を再度提示しよう。

問題は次のことである：ここで論理学者なら何というべきか。(§68)

このテキストの意味を完全に明らかにするためには「ここで」が何を指すのかを知る必要があるが、それは明らかに直前の小節§67が想定するある状況である。その全体を次に示す。

我々が誤りというものを排除して考え、現実にも誤りに遭遇しないような場合に常に誤りを繰り返す人間を想像することができるだろうか。

例えばその人は私と同じ確実性（とそのあらゆる印）をもって、自分はどこどこに住み、何歳であり、しかじかの町から来た、等と言う、しかし間違っているのである。

しかしその場合この人はこの誤りとどのように関係しているのか。私はどのように考えるべきか。(§67)

この後に先の問いが続くのである。従ってそこで問われているのは、自分の住む場所や年齢といった（それについて我々が通常誤りの可能性を排除する）誤りの限界の論理的意味、あるいはその限界を侵犯することの論理的意味であることは明白である。我々の問題とはこの問いのスコープ、すなわちこの問いがどこで答えられようとして発せられているのかである。この問いはサブシークェンスａ(§§66-70) 内部で発せられそこで答えられようとしているのか、それともシークェンスⅠ(§§66-83) という場で発せられそこで答えられようとしているのか、それとも『確実性』第二部というより大きな場でその全体に対して発せられた問いなのか。一見すると明確な答えが存在しないかに見えるこの問いに対する答えは、§68の問いとシークェンスⅠの思考全体の関係を考察することにより見出せるのである。

§68の問いに直ちに続く小節は明らかにこの問いに呼応している。その全体は次の通りである。

私は次のように言いたい：「もし私がそれについて間違っているのなら、私が言うどんな事についても自分が正しいという保証を私はなくしてしまう。」しかしだからといって他人は私についてこう言わないし、私も他人についてそう言わない。(§69)

ここでもまた発話の名への転化という「技法」が用いられている。誤りの限界の論理的意味という問いに対する答えの手がかりとしてウィトゲンシュタインはここで、「もし私がそれについて間違っているのなら、・・・」という発話を真剣に自分がする時に表現しようとする特異な確実性を指し示そうとしている。それは第一部§51で「だって、これについてどんな誤りがあるんだい。」という発話によって指示されたのと同じ確実性である。しかし我々は§69の思考が§68の問いに答えているということはできない。何故ならここでは問題となって

いる確実性が、自らその確実性を表明する「私」の立場から捉えられたものとして指し示され、考察の対象として提示されているに過ぎないからである。我々の以前の用語で言うならこの思考は内在的視点から問題となっている確実性を指し示しているに過ぎない。それに対して§68の問いは明確に「ここで論理学者なら何と言うべきか」を問っているのであり、「私」によって表明された確実性の論理的規定の分析を要求しているのである。従って§69は§68の問いに対する手がかりを与えてはいても、答えを与えるものではない。そしてその後のシークェンスⅠの思考を辿るなら、この問いに対する答えは§83において極短く与えられていることが認められるだろう。この確実性は「我々の基準体系に属する」経験命題が持つ確実性であることがそこでは述べられる。しかしこれは極めて不十分な答えであり、あくまでそれに続く思考の展開を前提としている。というのもこの答えは元の問いを「基準体系とは何か」という別の問いに置き換えているに過ぎず、答えというよりは答えへのひとつの道標にすぎないのである。従って§68の問いがシークェンスⅠというローカルな場を超えて発せられているものであり、『確実性』第二部全体の思考運動の方向と構造に深く関わるものであることがわかるのである。その関わりが何であるかは次章で改めて考察しよう。

第二の非主題的関係は§76のメタ哲学的言明が第二部全体に対して持つ関係であるが、これは第二部の各シークェンスの内部構造が明らかになった時にのみ明確に語りうることであるから、第六章において考察することにしたい。

以上の§68と§76は「ローカルな構造に埋め込まれながら思考運動全体に対するグローバルな役割をになった小テキスト」という、ウィトゲンシュタインにしばしば認められるテキストの在り方を例示している。それは一方で思考運動の全体的構造を確保しつつ、他方で自由な形式でテキストを生成してゆくというウィトゲンシュタイン独特の思考とテキストの在り方を可能としている「小道具」の一つである。

シークェンスⅡ　シークェンスⅡはⅠと異なり主題的一体性を持たない。すなわちそのシークェンスとしての一体性は各サブシークェンスが同一の主題を巡って展開されていることには存しない。従ってシークェンスⅡが単に他のシークェンスの終点と起点によって前後を区切られた小節の集積ではなくシークェンスとして存在しているのだということを示すためにはこのシークェンス固有の一体性を明らかにする必要がある。このシークェンスが主題の共有に依

らない一体性を持つとは、それが固有の始点を持ち、その始点が内包する可能性と秩序に従ってシークェンス全体が何らかの結びつきを持つということであるから、我々の分析はこのシークェンスの始点を見出し、それとこのシークェンス各部分との見えない結びつきを探ることから始めなければならない。

かかる観点からシークェンスIIの最初のサブシークェンスａ（§§84-86）とその冒頭の小節§84を検討するならば、そこには新たなシークェンスの始りを画する思考の動きがはっきりと認められる。すなわち、「地球は自分が生まれるはるか以前から存在してきたことを自分は知っている、とムーアは言う。・・・」という始りを持つ§84は二つの要素の共在によりシークェンスＩの思考との断絶と連続性を同時に示すことにより、新たな思考の始りを画しているのである。第一に§84は「地球は私が生まれる遙か以前から存在してきたことを私は知っている」というムーアの具体的発話を考察の起点とすることにより、「誤りの限界」という一般的な主題についてではなく、ムーアがこの発話（ムーア言明）によって示そうとした具体的な確実性あるいは知識を考察の対象としている。シークェンスＩの思考が「誤りの論理的限界」という主題（概念）を一般的な相の下で捉えていた（この事はシークェンスＩにおいてムーアへの言及が一度もなされなかった事のうちに最もよく示されている）のに対し、ここではムーアという具体的個人と彼の示した具体的思考と具体的確実性に直接関わる思考が開始され、思考は全く新しい相貌を帯びているのである。ムーアという個人の思考と確実性に直接かかわるという思考のこの在り方はサブシークェンスａのみならず、ゆるやかな仕方においてではあるがシークェンスII全体に浸透している。ムーアへの言及がシークェンスIIで§§84、86、91、92、93の五小節においてなされているというのはその一つの現れである。この様に§84の思考はシークェンスＩからの明確な断絶をその「個別的思考に関わる」という点においてはっきりと示しているが、同時にその主題において潜在的にシークェンスＩと連続しているのである。シークェンスIIの主題提示部である§§84-85で緩やかに思考の対象として取り出されるのは「地球は私が生まれる遙か以前から存在してきたことを私は知っている」という言明の発話者であるムーアという個人と「地球は自分が生まれる遙か以前から存在してきた」という命題の間の認知的関係に他ならない。この関係は具体的発話における具体的個人とある命題の関係であり唯一無二の具体的関係であるが、それが思考の対象として取り出され、繰り返し思考されその内容が言語的に表現されるものとして主題化される場合、それは何らかの一般的な相の下でのみ対象化され主題化される。こうした

主題化にともなう必然的一般化は§84において繰り返し示唆された後、次のように§86により遂行される。

ムーアの命題の「私は知っている」を「私は揺るぎ無く確信している」に置き換えてはどうか。(§86)

これはムーアとムーア命題の具体的な認知的関係という唯一無二の対象から「揺るぎ無い確信」という一般的対象を抽象する解釈の試みであり、こうして抽象される対象とは「確固としていること」であり、「疑い得ないこと」、「誤り得ないこと」であり、「誤りの限界」というシークェンスⅠの主題と本質的に同一対象である。従ってシークェンスⅡの主題提示部§§84-86が非明示的に内包する問いは、抽象化というフィルターを通してではあるが、シークェンスⅠの§68の問いと同一なのであり、シークェンスⅡの思考はその問いを異なる相貌の下で改めて追究しているのである。

かかる観点からシークェンスⅡを改めて通覧するなら、三つのブシークェンスb、b′、b″を異なる相の下で貫いているスレッドβの活動は、このシークェンスの主題提示部が内包する問いに答えようとする思考の様々な試みを表しており、そこで次々と繰り出される「探究と行動の原理」(§87)、「世界像」、「神話」、「ゲームの規則」(§95)、「導管」(§96)、「思考の河床」(§97)、といったこのシークェンスを特徴付ける豊かな形象と比喩はすべて「誤りの限界」という主題の解釈であり異相であることがわかるだろう。こうした一連の比喩、形象、異相を通じて、一方で「私」に疑いと誤りの限界として体験されるムーア命題が同時に、我々の信念体系の中で固定され規範として機能している経験命題である、という思考が重層的に成形されてゆくのである。かかる過程、すなわちサブシークェンスaという主題提示部において潜在的に存在するスレッドβがサブシークェンスb、b′、b″で展開し「誤りの限界の論理的意味は何か」という『確実性』第二部の核心の問いへの答えを重ね造ってゆく過程が、シークェンスⅡの始点に発しこのシークェンス全体を一つに結び合わせている第一の繊維である。

この思考過程ではまた、規範として固定された経験命題たる「誤りの限界」の持つ二つの重要な特徴が指摘される。「誤りの限界」の二つの特徴とはその無根拠性と非明示性である。シークェンスⅠの§78で先行的に予示された「誤りの限界の無根拠性」という主題はシークェンスⅡで§§89、92、94において明確な思考を形成する思考の糸として登場する。我々はそれをスレッドβ'と命名した

のであった（なお§89の思考については単に「限界の無根拠性の指摘」としては形容しきれない微妙さと重大な意義をもっているが、その詳説はシークェンスIVの分析に譲る）。他方「誤りの限界の非明示性」、すなわちムーア命題が象徴する誤りの限界は一種の規範として機能しているにもかかわらずそれは明示的規則によっては表現できないという性質は、すでに第一部から第二部への主題引き渡し点であった§51で明瞭に指摘されていたポイントであり、第二部ではシークェンスIIにおいて再登場し§§84、87で反復的に触れられているが、そこでこのポイントが核となり思考が展開されるには至っていない。それゆえ我々は「誤りの限界の非明示性」という主題を独立した思考の糸とは認められないのである。この段階で「誤りの限界の非明示性」という概念はウィトゲンシュタインの思考の一つのポイントではあるが活動する思考の糸では未だないのである。しかしながらこのポイントと第二部の思考全体との関係を視野に入れるなら、「誤りの限界の非明示性」というポイントの問題提示部§84での触れられ方は今後の思考の展開に対して極めて重要な意味を持っており、ここで確認しておく必要がある。

シークェンスIIの問題提示部である§84で「限界の非明示性」というポイントは、ムーア命題に関する我々の「知識」が我々の記憶のうちに起源を持たないこととして次のように指摘・導入される。

> ・・・さてムーアが果たしてこれやあれを知っているのかは哲学的に興味の無いことであるが、そうしたことが知られるということ、そしてそれがいかにして知られるのか、は哲学的に興味深い事である。・・・しかしムーアはまさに次のようなケースを選んでいるのである、すなわち彼が知っていることを我々誰もが知っているようにみえるが、いかにしてそれを知ったのかはだれも言えない、というケースを。・・・というのも、ムーアは私にも開かれていたが私は追求しなかった思考過程を経て彼の命題に到達したというのではないからである。(§84)

ここで我々のムーア命題の知識（＝ムーア知）の起源の特異性、すなわちそれの起源の記憶が我々の誰にも存在しないということが指摘されている。このことは誤りの限界の非明示性と表裏一体の関係にある。なぜなら誤りの限界はムーア命題によって画されている（はず）なのだが、そうした命題はその起源において我々の記憶にそれとして書き込まれなかったので、我々はそれを限界として枚挙し、限界を言語的に明示的に表現できないのである。このようにシー

クェンスIIの問題提示部で「誤りの限界の非明示性」という第一部以来の重大なポイントが「限界の（知識の）起源」という問題と重ね合わされて提示されている。それは「起源」の問題と「非明示性」の問題の不可分さを予示しているのであり、このポイントはやがてスレッド β''＜限界の起源＞として自らの思考を紡いでゆくことになるのである。

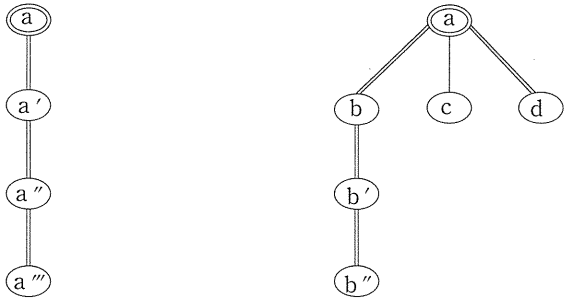
このようにシークェンスIIのサブシークェンスb、b′、b″はシークェンス全体の始点と「誤りの限界」という主題によって結びつき、そのことによってシークェンスの一体性に寄与している。それに対してサブシークェンスc（§89）とd（§§90-91）は別の結びつきをシークェンスの始点（§§84-86）と持っている。サブシークェンスc、すなわち§89の思考は「疑いの限界」という主題に関わっており、主題という点に関する限りシークェンスIIの他の思考から完全に断絶されており、シークェンス全体とどのような関係・一体性を持っているのかを把握するのは困難である。そこで展開されている思考はある意味で未だ不完全であり明瞭な輪郭を持っていない。それは「疑いの限界」を主題とするシークェンスIVで再登場し、とりわけその§117で反復・拡張され、我々はそこで始めてシークェンスIIの§89でどのような思考が試みられようとしたのかを遡及的に知ることができるのである。従って主題的、内容的に§89はシークェンスの他の部分から孤絶した典型的な先行的予示の場である。しかしながらウィトゲンシュタインの思考とテキストが織り成す一体性とは主題的一体性ばかりではない。サブシークェンスc（§89）がシークェンスII全体と持つ一体性とは思考において用いられる例を共有するという例的一体性なのである。シークェンスIIの始点§84でムーア命題の例として用いられたのは「地球は私が生まれる遙か以前から存在してきた」という命題である。今これを地球ムーア命題と名付けるなら、地球ムーア命題はシークェンスII固有の例であり、その印だと言うことができる。先行するシークェンスIでは自分の住所や年齢という例が、後続するシークェンスIIIでは「私は月へ行ったことがない」という例が用いられ、そのいずれにおいても地球ムーア命題は一度も登場しない。それに対してシークェンスIIで§§84、85、89、91、92の五箇所でそれは登場し、今問題になっているサブシークェンスc(§89)もその一つなのである。このようにサブシークェンスcはシークェンスII全体と思考の例を共有することによる一体性、すなわち例的一体性を持っているのである。シークェンスとは生きた思考の糸たるスレッドの活動が行われる場としての思考の現在であり、同時にそうした活動の産物であったことをここで再度想起しよう。こうした思考活動がすべての思考

と思想の源泉なのだが、それは決して抽象的な主題に直接関わってなされることはない。そこには必ず具体的例が必要なのである。例えば思考の糸はムーア命題一般について生きた思考を生成することはできない。必ず「ここに手がある」とか「地球は私の生まれる遙か以前から存在してきた」といった具体的例を思考の対象としなければならない。さもなければそこでなされるのは思考の生成ではなく、かつて（何者かによって）生成された思考の名や印の反復にすぎないのである。それゆえ思考の同時的現在としてのシークェンスが存在するために例的一体性は主題的一体性におとらず重要な要素なのである。例を共有するとは思考の時間を共有することである。

他方サブシークェンスd(§§90-91)はシークェンスの始点§§84-86と主題的一体性を持っている。ただサブシークェンスdが始点と共有する主題は「誤りの限界」ではなく「我々とムーア命題の認知的関係は知識と呼びうるものか」というものであり、それは別の観点からみれば「ムーアはムーア命題を知っているのか」という主題である。ここで再度§§84-86の思考を振り返ってみるならば、そこに二つの主題が編み込まれていたことが分かるだろう。第一は「地球が私の生まれる遙か以前から存在してきたことを私は知っている」というムーアの言明に始りながらそれを§86において知識ではなく命題の確固さ(固定されているということ)の問題として再解釈する道であり、それがスレッドβ<誤りの限界>であった。他方§85の思考は、ムーアがムーア命題について「私は知っている」という場合それはどのような知識なのか、そもそも知識と呼べるのか、そもそもどのようなものが知識と言われ、どのようなものが知識でないと言われるのか、といった問題について緩やかに思考を開始している。それは第一部において既にスレッドα3<ムーアの知識観と「私は知っている」の用法批判>とスレッドδ1<「私は知っている」の用法>、δ2<状態としての知識観批判>として登場し活動していた思考の糸の不定形な再現であり、その延長がサブシークェンスd(§§90-91)なのである。§90では「外界の内的表象としての知識」という概念が批判の対象として提示され、§91では正当化が知識の要件であるならムーアはムーア命題を知っているとは言えないことが示される。これらの思考はシークェンスIIの他の思考と微妙で不定形な関係を持っているが、それらは将来「限界」と「知識」というここでは分離している二つの主題の接点が明示化されるときに初めて遡及的に認識されうるものであり、シークェンスIIの時点では微妙な関係をもった曖昧な思考というふうにしか認知できないものである。

このようにシークェンスIIの各部分はその主題提示部であるサブシークェンスａと「誤りの限界」という主題を介した主題的一体性、「ムーアはムーア命題を知っているのか」という主題を介した主題的一体性、地球ムーア命題という例を介した例的一体性という三種の一体性のいずれかを持つことによって全体としてはある非主題的一体性を持っている。こうした一体性、すなわちシークェンスの各部が単一の始点と幾つかの関係により、いわば放射状に結ばれている一体性を内的一体性と呼びたい。シークェンスIIは内的一体性を持つ。それに対してシークェンスＩが例示する主題的一体性はシークェンス各部が単一の始点と主題的関係により結ばれたものである。これら二つの一体性を概念的に示したのが図５[3]である。

＜図５　シークェンスＩ、IIの一体性の概念図＞



シークェンスＩ：主題的一体性　　シークェンスII：内的一体性

（二重線は主題的結合を、単線は例的結合等の非主題的結合を、二重丸は主題提示部を表す）

シークェンスIII　シークェンスIII全体は「誤りの限界」のもう一つの異相である「確信の体系」という主題を巡る思考としての一体性を持つ。先ず前半のサブシークェンスａ（§§100-105）で我々の確固たる信念が形作る体系という概念が導入される。中でも§102と§103はシークェンスIII全体の主題提示部、すなわち構造的起点であり、新たな具体例を介した問いかけと返答を通じて、以下に続くシークェンス全体の思考の焦点となる「確信の体系」という主題を提示している。§102は、「私は地球から遠く離れたことはない」というムーア命題の否定を自分は現実に信じうるかという問いかけから始る。

私は、自分がかつて自分の知らない内に一種の無意識状態で地球から遠く離れた所へ連れてゆかれた事があって、そればかりか他の人はそのことを知っていながら私には言わないのだ、と信じられはしないか。・・・(§102)

この問いには否定的な答えが出されるが、その理由として示唆されるのが、このことは自分の確信が形成する体系に適合しないということであり、この過程で提示されるのが「これらの確信の体系 das System dieser Überzeugungen」という概念であり、この概念を主題とし、それを巡ってシークェンスの以下の思考は展開される。この主題提示部において用いられている「私はかつて地球から遠く離れた事はない」というのはムーア自身が用いた例であり、ウィトゲンシュタインはこれをしばしば「私は月に一度も行ったことがない」という形に変形して用いる。この変形版にちなみこの命題を月ムーア命題と呼びたい。月ムーア命題は続くサブシークェンス a′（§§106-108）でも引き続き用いられ、シークェンスIII全体は「確信の体系」という主題を介した主題的一体性とともに、月ムーア命題という例を介した例的一体性を持っているのである。

サブシークェンス a ではこの主題提示部に続いて「確信の体系」という概念の二つの重要な特徴が示される。「確信の体系」は「誤りの限界」という概念の異相であるから、それらは同時に「誤りの限界」という概念の特徴でもある。第一は既にシークェンスII（§§84、87）で触れられた非明示性という特徴である。ムーア命題に代表される我々の確信は体系を成すといっても、命題を列挙することによりその体系を記述することはできない(§102)。我々がある事を「確実だ」と言う場合、具体的な思考経路を経てそれにたどり着いたのではなく、それはそれ自身には触れられないような仕方で我々の問いと答えの全てに結び付けられているのである(§103)。第二は体系の体系性とでも呼ぶべき特性であり、体系が閉じた内部を形成し、様々な事がその内部でのみ意味を持ち存在しうるという特性である。今問題になっている「確信の体系」の内部でのみ意味を持ち存在しうる事柄とは、ある経験的仮説のテスト、確証、反証といった手続きであり、それらは我々が真理を求め、探し出し、確かめる際に遂行する諸行為であり、「『確実性について』の主題と構造(上)」で我々が真理行為と呼んだものである。確信の体系の体系性は次のように表現されている

・・・事実この体系は我々のすべての議論の多少とも恣意的で疑いうる出発点だというのでなく、むしろ我々が議論と呼ぶものの本質に属するのである。この体系は議論の出発点というよりは、議論の生命領域 das Lebens-

element der Argumente なのである。(§105)

続くサブシークェンス a′(§§106-108)では「確信の体系」がどのようにして我々の内部に形成されるのかを、すなわちその起源を巡って思考が展開される。その過程で、体系が何らかの根拠に基づいてではなく、外的に無条件に子供に植え付けれれる事、すなわち体系の無根拠性を巡っても思考は展開される(§§106-107)。こうして形成されたある体系を別の体系に対して正当化することができないという意味での体系の相対性に関しても思考は展開される(§108)。このようにシークェンスIIIのサブシークェンス a′(§§106-108)という短いテキストにおいてスレッド β<誤りの限界>、スレッド β′<限界の無根拠性>、スレッド β″<限界の起源>という第二部の思考を支配する思考の糸が一挙に姿を現す。スレッド β′とスレッド β″の系譜と展開については、それらについての思考がよりまとまって展開されるシークェンスIV、VI、IXの分析において論じたい。

このようにシークェンスIIIは明確な主題的一体性を持ち、そのシークェンスとしての実在性に問題はない。しかしシークェンスIIIのテキストはその構造について一つの問題を我々につきつける。それはシークェンスの区切り場所という問題であり、具体的には§§100、101の二小節の帰属問題である。この二小節は一体となった思考を表現しており、それはムーア「知」の普遍性、すなわちムーアがムーア命題を知っているのなら我々すべてもそれを知っているという事態を巡って展開されている思考である。この主題はシークェンスIIIの他の部分では全く登場しない。すなわち§§100、101の二小節は主題的一体性により存在しているシークェンスIIIの本体と主題的繋がりを持たないのである。この点に関する限りこれら二小節をシークェンスIIIの一部とみなす根拠はないのである。そればかりではない、主題に関するならそれらは先行するシークェンスIIと繋がりを持つのである。というのもシークェンスIIの主題提示部である§84でウィトゲンシュタインは、「私はこのこと(地球の存在)を自分がムーアに劣らず知っていると思うし、事が彼の言う通りだと彼が知っているのなら、私もそれを知っているのである」、という形でムーア「知」の普遍性について先行的に触れているのである。しかしながら主題的結びつきの存在そのものは直ちに思考の一体性を示すものではない。かけ離れた二つの思考が同一主題を偶然共有することはありうる。こうした観点からシークェンスIIの主題提示部と§§

100-101の主題的結合を検討するなら、それによって§§100-101がシークェンスIIの一部であると結論づけられるほど強いものではないと言わなければならない。第一に§§100-101の思考は§84で示されたものを展開するというよりは、それを明示化し反復する独立したものであり、第二に§101で用いられている例（「私の体は消滅し、しばらくして現れたりは決してしない」）はシークェンスIIの共通例(地球ムーア命題）ではなく、§§100-101はシークェンスIIと例的一体性を持たない。

このように§§100-101はその周囲のテキストと全く無縁というわけではないが、緩やかで不定な関係しか持たず、そのシークェンス帰属を判定するのが困難なテキストである。こうしたテキストを我々の分析で不定関係テキストと呼びたい。もし『確実性』全体がこうした不定関係テキストの連続であり、その全体には緩やかな主題的統一しかないのならば、「『確実性』は未完成のノートの集積である」という見解が正しいと言わねばならない。しかしながら、不定関係テキストは『確実性』においてしばしば登場するとはいえ、分量的にそれは全体のごく一部であり、それ以外の部分は複雑ではあるが明瞭な相互関係と構造を持っているのである。そうした複雑な、しかししっかりと編み上げられた思考の海のなかに浮かぶ島として不定関係テキストが所々に存在しているということは、むしろそれらが不定関係テキストであることにより全体の思考運動の形成に対して果たしている固有の役割、例えば思考の結合を一時ゆるめることにより新たな思考回路を探るといった役割があると考えるべきだと思われる。不定関係テキストがウィトゲンシュタインの思考運動の生成の中で果たす役割については、我々の分析が更に進行した後に改めて考察したい。

さて§§100-101というテキストはこうした緩やかな結びつきをその周囲と持っているのだが、シークェンス帰属に関して我々には次の三つの可能性が開けている：1）シークェンスIIに帰属させる、2）シークェンスIIIに帰属させる、3）いずれのシークェンスにも帰属しないテキストとみなす。我々は2）が正しい選択であると考えるが、それは以下に述べるようにウィトゲンシュタインの思考運動には視点のリズムと言うべきものがあり、そうしたリズムに応じた拍動と区切りは、§§100-101をシークェンスIIの終わりではなく、シークェンスIIIの始りとしていると見做せるからである。「『確実性について』の主題と構造(中)」で論じたように、「限界」についてウィトゲンシュタインが思考する場合、それについて「私は・・・し得ない」と体験する「私」という視点に立って考察する場合と、人間の認知体系の中でそうした限界命題が果たす機能を客

観的に考察する場合がある。我々は最初前者を内在的視点と、後者を外在的視点と呼んだが、「『確実性について』の主題と構造(中)」の考察は、第三部に至って内在的視点がウィトゲンシュタイン自身について取られる時、それは最早「視点」と呼び得ない実践的姿勢の様なものとなる事を示した。今問題となっている第二部では内在的視点のこうした自己超越はまだ起こっていないので、ここでは内在的視点、外在的視点、という用語を用いることにする。『確実性』第二部ののテキストをこうした二つの視点の交替という観点から見ると、そこにはあるリズムが認められる。それは新たな思考の開始点において先ず内在的視点に立ち、ムーア命題の限界性現象を「私」や「我々」の立場から具体例に即して記述し、その後次第に抽象化、客観化の過程を経てその現象の本質を外在的視点から、具体例抜きに、記述するというものである。すなわちシークェンスの始めにおいて内在的視点が優越し、シークェンス終結部において外在的視点が優越するというリズムがウィトゲンシュタインの思考を支配しているのである。例えばシークェンスⅠ（§66-83）では§§66、67、69、70で思考は明白な内在的視点からなされ、§§80-83では外在的視点からの思考があたかも結論部のごとくにシークェンスを締めくくっている。シークェンスⅡ(§§84-99)も§§84-85の問題提示部が内在的視点からの思考により形成され、限界の変化についての思考を展開する§§96-99で視点は明確に外在的である。こうした観点から§99と§100の二小節を比較するなら、そこには視点の転換が認められのである。すなわち§99まで続いた一般的・抽象的な語り口は§100に至ってムーア命題と「我々」の関係についてのものとなり、§101ではそうした関係を持つ命題の具体例が示されるのである。それに続く§102は「私はかつて自分が知らない無意識の状態で地球から遠く離れたことがある・・・と信じることはできないだろうか」という問いかけで始り、完全な内在的視点に立っている。それに比べれば§§100、101は完全な内在的視点とは言えないものの、それは明らかに§§96-99の完全な外在的視点とは異なる拍動を見せている。こうした理由により我々は§§100-101がシークェンスⅢに属すると判断するのである。

最後にシークェンスⅢの一体性の概念図を示す。

＜図6　シークェンスIIIの一体性の概念図＞

主題的一体性

シークェンスIV　シークェンスIVに関して我々はその分析を二つに分け、テキストの構造と思考の主題について別々に論じたい。これは『確実性』第二部の思考の展開の中でこれまでその兆候のみではっきりと把握することのできなかった構造的特性と思考の糸の特性がここシークェンスIVに至って同時に表面化するからである。その構造的特性とは緩やかな一体性と我々が呼ぶテキストの結びつきであり、思考の糸の特性とは「限界の無根拠性」という主題を核とするスレッド β' の中に潜む二つの相反する要素の対立である。

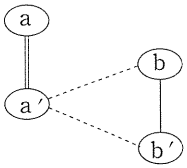
シークェンスIVの構造と緩やかな一体性　シークェンスIVはa、b、a′、b′の四つのサブシークェンスから構成されている。これら四サブシークェンスについて図3のスレッドの矢印を見るなら、a-a′というサブシークェンスの系列はスレッド β' ＜限界の無根拠性＞という共通の思考の糸に貫かれており、この思考がこの思考の糸の持続的活動により生み出された一体性のあるものであることが伺える。このことは次項の分析でより明確に確かめられるだろう。それに対してb-b′というサブシークェンスの系列の矢印欄を見るならば、そこには括弧に囲まれたスレッド $\delta 1$ の矢印がb′の欄に一つ記されているだけである。これが意味するのはシークェンスIVの二つのサブスレッドb、b′のいずれについても、それを構成する小節を貫く思考の糸が存在せず、従ってそれら二つのサブシークェンスに共通する思考の糸も存在しないことを意味している。言い換えるならそれらのサブシークェンスを構成する諸小節の思考は互いに独立しており、一つの思考を他が展開したり、反駁したり、例示したり、要約したり、等々の思考運動上の繋がりがその間に存在しないのである。かといってそれらは全く無縁なバラバラの思考の寄せ集めではない。サブシークェンスb（§§113-116）とサブシークェンスb′（§§121-123）を構成する七つの小節は「疑いの言語ゲームと確実性」という主題に何らかの関わりを持つ思考を表現している。従ってこれら二つのサブシークェンスのそれぞれは、似通った主題につい

て展開されているが互いに思考運動上の繋がりを持たない小節からなるテキスト、という特性を持っている。それは緩やかなまとまりを持つある主題（群）に関する相互に独立した思考の記録であり枚挙である。こうした緩やかな内的結合を持つテキストを思考のカタログとここでは呼びたい。前項で導入した不定関係テキストという概念は、それを取り囲むテキストと思考運動上の関係を持たず緩やかに結ばれているテキストを意味したのに対して、思考のカタログとはそれを構成する小節同士が思考運動上の関係を持たないテキストを意味する。前項で分析の対象とした§§100-101は外部と緩やかな繋がりしか持たない不定関係テキストであるが、§100と§101の間には例示という思考運動上の関係が存在するので思考のカタログではない。我々がこれまで分析してきたテキストでいうなら第一部シークェンスⅠ（§§1-9）が思考のカタログの条件を満たしている。そこではムーアの問題という緩やかな主題について相互に独立した様々な思考が枚挙・記録されていたからである。他方このシークェンスは第一部の主題提示部であり第一部の思考全体と動的な関係を持っているから不定関係テキストではない。

前項で述べたことと部分的に重複するが、ウィトゲンシュタインのテキストに関する根強い俗見の一つが、それは本質的に独創的な思考のカタログである、というものである。こうした俗見が、文体上は相互に独立した小節 Bemerkung を連ねてゆくというウィトゲンシュタイン自身の思考のスタイルによって強化されているのは事実であるが、我々の分析が示す§§113-116や§§121-123といった真の思考のカタログの存在は、『確実性』のテキストの大部分は思考のカタログとは程遠い複雑ではあるが明瞭な構造を持つテキストであり、持続するエネルギーと方向を持ったウィトゲンシュタインの思考運動の軌跡である事を示しているのである。

かかる分析に基づきシークェンスⅣの一体性を概念的に示すと図7のようになるが、こうしたタイプの一体性をシークェンスの緩やかな一体性と呼びたい。

＜図７　第二部シークェンスⅣの一体性の概念図＞



（点線は緩やかな主題上の類似を示す）

緩やかな一体性

シークェンスⅣとシークェンスⅡの構造を区別するのは、シークェンスⅣにはすべてのサブシークェンスがそれとなんらかの関係を持つような主題提示部が存在しないことである。サブシークェンスａとａ′に限っても、ａ′はａで提示された主題の展開というよりはａの思考の反復と拡張であり、次項の分析で明らかになるようにそれらは共に以前からの思考の糸の継続なのである。更にサブシークェンスａ、ａ′の系列とサブシークェンスｂ、ｂ′の間には、図の点線で示されているような緩やかな主題上の類似が存在するに過ぎない。このようにシークェンスⅣの四つのサブシークェンスはある共通の中心や軸によって結ばれているのではなく、部分間を結ぶ複数の糸の重なり合いによって全体として曖昧で緩やかな一体性を持っているにすぎず、それは『哲学探究』でウィトゲンシュタイン自身が「家族的類似性」と呼んだ統一の一例だと言うことができる。このように全体としては極めて緩やかな結びつきしか持たないにもかかわらず、これら四つのサブシークェンスを一つのシークェンス、すなわち思考の同時的現在と見做す根拠は、そこで示されている思考運動のリズムである。図７が示しているのは、ａ-ａ′というスレッド β' の思考運動が連続してなされるのでなく、いわばａ、ａ′という思考の強拍と、ｂ、ｂ′という様式上の共通性を持つ思考の弱拍が交互に現れるということである。そしてこうした思考の交替のリズムは図３においてａ-ｂ-ａ′-ｂ′というパターンによって現されるものであり、これまでの分析でも何度か登場したようにウィトゲンシュタインの思考運動の大きな特徴なのである。彼がある主題に沿って思考を展開する多くの場合、その主題を巡る思考運動は連続的に展開するのでなく、数小節長の思考の拍動を出現させたあと別の主題を巡る思考の運動と交替する、ということを何回か繰り返す。我々がここでシークェンスⅣと呼んでいるテキストもそうした典型的な交

替パターンを見せており、それがここに一連の同時的な思考運動の軌跡を見出す根拠である。

シークェンスⅣで展開されている主題について　シークェンスⅣの本体はスレッド β'＜限界の無根拠性＞が生み出すサブシークェンスａとａ′である。上述のようにそれらはサブシークェンスａにおいて提示された主題がサブシークェンスａ′において更に展開されるという具合には関連していない。それはサブシークェンスａが例を通じた新たな思考の起点として問題を提示するという構造を持っていないからである。これら二つのサブシークェンスの思考はシークェンスⅣに至るまでに少しづつ反復されてきたスレッド β'＜限界の無根拠性＞の活動の継続であり、そうした思考の以前からの連なりを考察することなくしてはこれら二つのサブシークェンスの関係やそこで展開されている思考の真の意味は明らかにならない。

かかる観点からシークェンスⅣまでのスレッド β'＜限界の無根拠性＞の活動の出現の系譜を図３でたどってみれば、それは次の六つのサブシークェンスの思考を生成してきたことがわかる。(Ia″に関して図３では§78にしかスレッド β' の出現が表記されていないが、以下の分析でも明らかになるように、スレッド β' による思考の生成という観点からすれば§§77、78の思考は明らかに一体のものであり、単に§78のみならず§§77-78、すなわちIa″全体がスレッド β' によって生成されたと見なければならない。)

Ⅰａ″（§§77-78）
Ⅱｃ　（§89）
Ⅱｂ″（§§92-95）
Ⅲａ′（§§106-108）
Ⅳａ　（§§109-112）
Ⅳａ′（§§117-120）

これら六つのサブシークェンスを構成する小節を注意深く検討し、そこで展開されている思考を比較してみれば、それらは次のＡ、Ｂ二つの系列に属することがわかる。すなわちこれら六つのシークェンスの思考はいずれも「限界の無根拠性」という主題を巡って展開されているのだが、実はそこに二つの思考運動の系譜があり、それらは内容的には深い関わりを持ちながらも一貫した思考の流れとしては別のものなのである。Ａ系列を形作る思考の流れを実践の論

理、B系列を形作る思考の流れを体系の論理と名付けたい。実践の論理と体系の論理は「限界の無根拠性」という思考の糸に内在する二つの要素であり、それらの間には微妙な緊張が存在し、ウィトゲンシュタインの思考に内在するこの緊張が第二部から第三部へと思考が継続し展開してゆくポテンシャルとなるのである。

A系列	B系列
Ⅰa″（§§77-78）	
Ⅱc（§89）	
	Ⅱb′（§§92-95）
	Ⅲa′（§§106-108）
Ⅳa（§§109-112）	
Ⅳa′（§§117-120）	
実践の論理	体系の論理

要約すれば実践の論理とは次のように主張する思考である。

> 実践の論理：疑いの限界が疑いの限界であることを根拠付けることはできないが[限界の無根拠性テーゼ]、だからといって疑いの限界を疑うことは実践的に無意味である［限界の実践的実在性テーゼ］

A系列に属する四つのサブシークェンスの中で、この実践の論理がそれと判る形で展開されていのは最後のⅣa′のみであり、とりわけその§117において実践の論理は明確に、しかしウィトゲンシュタイン独特のスタイルで表現されている。それに対して先行する三つのサブシークェンスで実践の論理の原形や祖形とみなせる思考が展開されているのだが、それらのテキストだけからそれを実践の論理の先駆形態であると判定するのは困難である。Ⅳa′において完全な形で実践の論理が姿を現した後それを物差しとして初めてそれらの中に実践の論理のおぼろげな姿を認めることができるのである。別の視点から見ればA系列とは実践の論理という思考が不完全な姿を繰り返す中で徐々に形成される思考の真の生成過程なのである。それは予め見通され計画されたものが順に実現してゆく過程ではなく、実現の暁に振り返って初めてそれが何かの生成過程で

あったことが認められる過程である。このようにA系列はウィトゲンシュタインにおいて思考の真の生成が生ずる一つの様式を示している。A系列のテキスト注意深く分析すれば明らかになるように、それは思考とテキストを反復しながら拡張してゆくという様式である。この思考の生成様式において似たようなテキストと似たような思考が何度となく反復される。しかし厳密にそれらは同一テキスト、同一思考の反復ではなく、未在の思考に向かって手探りで少しずつ思考が試みられ生み出される過程なのである。以下A系列において実践の思考がどのように生み出されるのかをたどってみよう。

Ⅰａ″（§§77-78）では確実性/疑いと誤りの限界の一例として掛け算の確実性について思考が展開される。先ず§77で我々が通常二回の検算は行うが二十回もの検算は行わないという現実について、これは怠慢ではなく二十回の検算を経た掛け算が二回の検算の掛け算より確実になるわけではない、ということが述べられる。そして§78でこれに対して即座に、二十回の検算で計算がより確実にはならないという根拠を与えることはできるか、という問いが発せられる。この二小節を単独で読んだ場合、極めて圧縮され省略された形で表現されている微妙な思考が何なのかをはっきりと言い表すことは困難である。しかしⅣａ′（§§117-120）で実践の論理の明確な形に触れた後これらの小節を検討すれば、そこには紛れも無い実践の論理が圧縮・省略された形で横たわっているのが認められるのである。通常の条件下で二回検算を行った掛け算は確実であり、疑いと誤りの限界である。二十回検算を行うとはこの疑いの限界を疑うことの象徴的表現に他ならない。従って§77で、通常二十回もの検算を行わないのは怠慢ではなく、二十回の検算により計算がより確実になるというわけではない、という形で表現されているのは、計算という実践において「確実な計算」という疑いの限界を現実に疑うことはできないということ、すなわち実践の論理の後半部である限界の実践的実在性テーゼなのである。そして§78で問われているのは、この限界を限界たらしめている根拠を与えることなのだが、それは否定的答えを遠方に想定したウィトゲンシュタイン独特の問いかけであり、そこでは実践の論理の前半部である限界の無根拠性テーゼが非断定的な形で示されているのである。このようにⅠａ″（§§77-78）において実践の論理はウィトゲンシュタイン独特の修辞的文体の中に圧縮された形で表現されている。

Ⅱｃ（§89）は§89が単独で構成するサブシークェンスであるが、その中に実践の論理の省略形というべきものが圧縮されて表現されている。§89は二段落からなるが最初の段落を§89a、第二の段落を§89bと名付けるなら、§89aでは「地

球が私の生まれる遙か以前から・・・ことをあらゆる事が支持しており、それに反するものは何も無い」と言う言明が地球ムーア命題の確実性の表明として提示される。「・・・ということをあらゆる事が支持しており、それに反するものは何も無い（Alles spricht dafür und nichts dagegen, daß・・・)。」という言明は確実性/限界性を表明する典型的な手段として取り上げられているのであり、既出の「私は・・・と知っている」や「ここでの誤りとはどのようなものなのか」と同様に確実性/限界性の名として用いられていると言ってよい。§89b ではこれに対して立て続けに二つの問いが繰り出される。先ず「しかし私はその反対を信じることはできないのだろうか」、と地球ムーア命題の限界性を問いただす様な短い問いが発せられ、その後この問いを置き去りにするかのように間髪を入れず、「しかし問題は：この［地球ムーア命題を否定する］信念が実践的にどのような働きをおよぼすのだろうか、である」、と地球ムーア命題という限界を疑うことがどの程度現実的に疑いとして有意味であるのかが問われる。これらはいずれもその後に答えを伴わない短い問いであり、何かを示すとしても極めて遠方にある答えを想定することによりほのめかすというウィトゲンシュタイン独特のスタイルである。従ってこれらの問いにより実践の論理やその先駆形が表現されているとは決して言えないのだが、それぞれの問いが遙か遠方に限界の無根拠性と限界の実践的実在性を指し示していることは最早明らかだろう。そしてこのことはⅣａ′の§117において§89と極めて似通った、しかし同一ではないテキストが登場し、§89では遠方に指し示されているに過ぎないものが目の前に示されることによって再度確認されるのである。この§89と§117の間に見られるテキストと思考の微妙な変遷関係は、ウィトゲンシュタインの思考の生成過程を考える上で極めて重要なものである。かなりの間隔を置いて極めて似通ったテキストが再度、あるいは再再度現れるという現象はウィトゲンシュタインのテキストを探索する者がしばしば体験するものである。§89と§117もこうした現象の一例である。こうした現象に遭遇するとその反復性が強く印象づけられるが、§89と§117はその反復の中で重要な思考の生成、より正確に言うならば、始め問いという形で遠方に指し示されていたものが明示的に示され語られる過程、が生起していることを告げている。そしてその過程で類似のテキストが反復されるということが極めて大きな役割を果たしているのであり、ここに思考の創出におけるウィトゲンシュタイン独特のスタイルが認められるのである。今§89と§117が例示しているような、類似ししかもその変化を通じて思考が生成されるようなテキストの系列を反復拡張テキスト群と呼ぶな

ら、ウィトゲンシュタインの思考の生成の有り様と思考の創出というものに興味を持つ者は、反復拡張テキスト群に注目すべきだと言うことができる。

このようにIIｃの思考は実践の論理の明示的提示部であるIVａ′の思考に直結するものであり、前者の明示化が後者だと言えるのに対し、IVａ(§§109-112)は実践の論理を分散させた形で内包するものの、そこにいたる一つの回り道としてそれ自身の興味において探索されている思考であると言うことができる。先ず§109で「経験的命題はテスト可能である」という言明が思考の名として用いられ、それが名指す経験命題の普遍的テスト可能性という思考が批判的検討の対象として俎上にあげられるが、そこで問題となるのがムーア命題を始めとする限界を表す命題の経験的テスト可能性であり、従ってここで限界の経験的根拠付けが暗に問題視されていることは、これまでの思考の流れから容易に推測できることであり、同時にこれに続くテキストにより確証されることでもある。従って続く§110で「なにがそのテストとみなされるのか」と問われる時、「その」と言われるのは、シークェンスIVでは月ムーア命題に代表される限界命題である。この問いの後一種の問答形式により、どのような命題も等しく経験的にテストできるはずだ、という思考が批判され、同時に経験的テストの限界が根拠付けられない前提ではなく根拠付けられない行動様式である、ことが述べられる。この段階で実践の論理と親和性を持つ思考が展開されていることがわかるだろう。限界の実践的実在性テーゼについてはここで実践が究極的限界であることが示されている以外このサブシークェンスでは展開されないが、限界の無根拠性テーゼについては続く§111で、月ムーア命題がそれに対するどんな根拠付けよりも確実であるという意味でそれに根拠を与える事ができないと述べられる中でより明確に示される。続く§112ではこうしたムーア命題の根拠付け不可能性こそがムーアが述べたかったことではないかというムーアの再解釈が示され、このサブシークェンスの思考の焦点がムーアの解釈にあったということが明らかになる。

こうした寄り道を受けて続くIVａ′でいよいよ実践の論理がその全貌を現し、これまでの不完全な思考の系列全体が遡及的に意味付けされるのである。§117は§89に比べて微妙な点で変化している。先ずそこで用いられている例は地球ムーア命題ではなく月ムーア命題である。そして§89では「・・・を全てが支持し、それに反するものは何も無い」という言明が限界表明の手段として選ばれたが§117では「それを支持するものは何も無く、全てがそれに反している」というムーア命題の否定命題に対する否定言明が限界表明の手段として用いられ

ている。さらに§89では先ず疑いの限界の無根拠性がほのめかされた後、限界を疑うことの実践的無意味さが示唆されたのに対し、§117ではその前半で限界を疑うことが実践的に無効であり不可能であることが明示され、その後半で「それを支持するものは何も無く、全てがそれに反している」という言明によってムーア命題の根拠を示しているという思考が問題化され、限界の無根拠性テーゼに向かった思考が開始される。続く§118と§119では別の例を用い、それについて我々が「それを支持するものは何も無く、全てがそれに反している」という場合、具体的には何の経験的根拠も示しておらず、また示し得ないことが示され、限界の無根拠性テーゼがより明確に示される。サブシークェンス最後の§120では限界の実践的実在性テーゼが引き継がれ、限界命題への疑いが実際には疑いとして表明され得ないこと、それを疑うという人がいても実際には何の違いも無いのだから疑わせておけばよいことが示唆される。

このようにA系列を通じ不完全で不明瞭な形で反復された実践の論理はⅣa′ではっきりと姿を現すのである。このようにⅣa′における実践の論理の明確化へと連なる思考の流れの起点を求めて溯れば、生活が示す知識について述べていた第一部シークェンスⅠ§7へとたどり着くであろう。この「思考の流れ」はある主題を巡って思考が展開される中で繰り返し出現するある思考の形であり、思考の糸（スレッド）の内部に存在するより明瞭な形を持つ思考系列ものである。実践の論理という思考の流れが今後どのような経緯をたどるのかは、我々が今後の分析で注目すべき点の一つである。

続いて同じく限界の無根拠性についての思考の流れであるB系列とそこで表現されている体系の論理について考えよう。体系の論理の主張を簡略に示すと次のようになる。

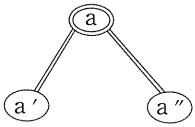
> 体系の論理：ある人の信念体系、あるいは世界像は子供の時に外部から植え付けられるものであり、それ自身の真理性には根拠が無く、真理という概念はその内部でのみ妥当性を持つ

この思考の流れは実践の論理とは異なり、ウィトゲンシュタイン自身により圧縮や省略やほのめかしなく明快に述べられているので、その内容はⅡb′（§§92-95）とⅢa′（§§106-107）を通覧すれば直ちに明らかになる（例えば§93はその簡潔な要約とみなせよう）ものなので、その内容についてここでこれ以上論じる必要はないと思われる。ここで注目しておくべきは、この体系の論理における幾つかの思考の糸（スレッド）の交差である。体系の論理とは元々限界の

無根拠性に関する思考であり、スレッド β' の活動に内在するものである。しかし上の要約が示すようにそれは「限界の起源」を巡る思考の糸であるスレッド β'' と「真理体系の相対性」を巡る思考の糸であるスレッド ξ と密接な関係を持っている。従って体系の論理が追求される時、これら三つの思考の糸は次第に一つに纏め上げられることが推測される。と同時にそのように思考が進行するなら、それと実践の論理との緊張が次第に高まることも予想できる。というのも本質的に体系の論理は限界の限界性を否定する思考であるのに対し、実践の論理は限界の実在性を肯定するところにその本領があるからである。この緊張がどのように第二部で残存するかは第六章で改めて論じたい。

シークェンスV　シークェンスVはa（§§124-129）、a′（§§130-135）、a″（§§136-140）の三つのサブシークェンスからなる。サブシークェンスaがシークェンスVの主題提示部であり、そこで提示される主題は「経験的判断という実践」あるいは「経験的判断ゲーム」と表現されるべきものである。サブシークェンスa′とa″はこの主題に内包される二つの要素のそれぞれを独立に展開している。すなわちVa′は「経験的判断という実践そのものの経験的無根拠性」という要素を巡る思考を、Va″は「経験的判断という実践を規定する原理としてのムーア命題」という要素を巡る思考を展開している。従ってシークェンスVは主題提示部を頂点とした主題的一体性を持ち、それを概念的に図示すると図8のようになる。

＜図8　第二部シークェンスVの一体性の概念図＞



主題的一体性

以下三つのサブシークェンスの思考について順次検討してゆこう。

主題提示部であるサブシークェンスaで提示される主題はこのサブシークェンスそのものでは単に「判断するということ Urteilen」というふうにしか表現されていない。しかしこの言葉によってウィトゲンシュタインが表現しよ

うしているのが個々の判断という行為ではなく、そうした行為を判断行為として成立させ存立させている実践あるいは言語ゲームの全体であることは、続くサブシークェンスにおいてこの同じ物が「我々の判断ゲーム」(§131)、あるいは「経験的判断という実践」(§140) というように表現されていることから明らかである。Ｖａは先ず「私には手がある」というムーア命題(以下これを手ムーア命題と呼ぶ) を具体的例として用い、我々が「判断」と呼ぶ実践において手ムーア命題のような経験的命題が確実で固定された基準として用いられており、従って他の経験命題と同じように経験的テストの対象とはならないことを示す (§§124-127)。続いてウィトゲンシュタイン自身が現実に習得し実践している判断ゲームが「これ das」として直接指示され、いわば思考の生きた素材として目の前に提示される(§127-128)。このようにして提示された我々の経験的判断という実践 (あるいは言語ゲーム) の特性が以下の二サブシークェンスで考察されるのである。

続くサブシークェンス a′ では我々の経験的判断という実践そのものが経験的根拠に基づいているという思考が批判の対象とされ、我々の経験的判断という実践そのものは経験を根拠としていないという思考 (§131) が展開される。先ず手ムーア命題に何故我々は通常「目で見て確かめる」という経験的テストを適用しないのかという問いかけがなされ、それに対する「それが経験的帰納的に裏付けられているからだ」という答えが実は空虚であることが徐々に示されるのである (§§133-134)。同時にこのサブシークェンスでは、我々の現在の経験的判断という実践がいくつもある判断実践の一つにすぎず、例えば過去の時代の判断実践という他の実践に対して正当化できないという実践の相対性がほのめかされる (§132)。従ってＶａ′の思考は本質的に体系の思考の流れを汲むものである。

続いてサブシークェンス a″ でこうした我々の経験的判断という実践の在り方と、ムーア自身の言明の解釈を重ねあわせるような思考が展開される。§§136-137でシークェンスIIの§84の思考を引き継ぐような形で、ムーアが「私は・・・と知っている」という形で枚挙した命題 (ムーア命題) が哲学的に興味があるのはそれをムーアという個人が知っているからではなく、それらムーア命題が我々の経験的判断の体系において特別な役割を果たしているからであることが述べられる。いうまでもなくこれは第一部以来のムーア言明の公的解釈の一形態なのだが、このバージョンの固有性は、ムーア命題が特別な論理的役割を果たしている体系・実践を「経験的判断という実践」としてとらえてい

ることである。それについてムーアが「私は知っている」と言い、ウィトゲンシュタインが「私や多くの人にとって確実である」(§116) と言い直そうとしている命題は、我々がそれに対してあえて経験的テストをすることがなく、特別な探究によらずにそれらの「真理」に到達するという事を通じて (§138)、我々が「経験的判断」と呼ぶ実践（言語ゲーム）を規定しているのである。そして経験的判断という実践がムーア命題によって規定されているということ自体、実践（言語ゲーム）というものが規定される独特の様式を体現しており、このことの指摘がＶａ″の重要なポイントの一つとなっている。経験的判断の言語ゲームがムーア命題により規定されるというのは、言語ゲーム（実践）が、例えば帰納法といった一般的規則によってではなく、「私には手がある」といった具体的判断例によって規定されるということであり、このように規則ではなく例によって規定されるということが実践 Praxis の本質に属するのである（§§139-140)。「言語ゲーム」という言葉は当然のようにそれが規則によって規定されていることを我々に予期させるが、現実に我々がその中で生きる言語ゲーム（実践）には（人為的に法制化された場合を除き）明示的な規則が存在しないというパラドキシカルな事態は『哲学探究』の思考を悩ませたものである。「『確実性について』の主題と構造(上)」でも述べたように『確実性』はこの問題を「卒業」している点で『探究』から優越的に区別される。しかも『確実性』の思考は単に実践を規定するものの非明示性に関して明確であるだけでなく、何故それがそうなのかについて踏み込んでゆくのである。そうした思考が「限界の起源」を巡る思考であり、それが展開される場が続くシークェンスVIである。

シークェンスVI　このシークェンスは「限界の起源」という主題を核とするスレッド β'' が初めて本格的に思考を展開する場である。そこで展開されるのはシークェンスII §85で立てられた問い「ムーア命題はいかにして知られるのか」に答えようとする思考であり、同じく§85で指摘された、「ムーアは我々誰もが彼の知っていることを知っている様に見え、しかもどのように知ったのか言えないというケースをうまく選んでいる」、というムーア命題の謎めいた特徴を解明しようとする思考である。その結果として生み出されるのが「信念体系の固定部のレリーフ起源説」とも呼ぶべき一つの「理論」であり、思考の内容という点に関する限りそれは『確実性』の中で最も興味深く独創的な思考である。シークェンスVIの思考は「限界の非明示性」として第一部以来見え隠れしてきた思考のかすかではあるが重要な流れと密接に結びついている。

構造的に言えばシークェンスVIはa（§§141-144)、b（§§145-151)、a′（§§152-153）の三つのサブシークェンスからなり、a-b-a′という三つのサブシークェンスの連なりは典型的なウィトゲンシュタインの思考の強弱のリズムを示している。すなわちシークェンスVIを支配するスレッドβ''が活動するのはaとa′の二サブシークェンスであり、それらに挟まれたサブシークェンスbでは「限界の起源」という全体の主題と無関係ではないが別の主題を巡って緩やかに相互に結びついた思考が展開される。結果としてVIaとVIa′は明確な焦点と方向を持った思考が生み出す思考の強拍となり、VIbは興味深くはあるが内部的結合が緩やかで周囲との関係の不定な考を宿す思考の弱拍となっているのである。以下先ずIVaとVIa′について、次いでVIbについて思考の内容と流れについて考察しよう。

VIaからVIa′へと連なる思考の運動はウィトゲンシュタイン独特の反復統合という思考運動のパターンを示している。反復統合とはある思考に対してその帰結や前提や批判を連ねるのでなく、本質的にはそれと同じ思考を反復するのだが、その際以前は明確に表現できなかった部分により明確な表現を与えるとともに、以前切り離して別々の小節で提示されていた思考の要素を統合し単一の小節で提示実現するという思考様式であり、§§84、117が例示していた反復拡張と並んでウィトゲンシュタインにおいて思考が創出される際の重要な思考様式であると考えられる。

シークェンスVIでは「信念体系の固定部のレリーフ起源説」という新たな思考がサブシークェンスaとa′を通じて反復統合という様式により出現する。従って始めのサブシークェンスaは思考がそこから放射状に展開されるという意味での主題提示部ではない。サブシークェンスaの冒頭部で先ず、我々の信じるのは個々の命題ではなく命題の体系であることが示される(§§141-142)。この冒頭部とそれに先行するシークェンスVの末尾（§140）の関係はウィトゲンシュタイン独特の思考の切断・結合様式を示している。「経験的判断という実践」という主題を巡るシークェンスVの思考の末尾として§140では、我々が「経験的判断という実践」を規則によってではなく「判断例 Urteile」とそれらの相互関係を通じて習得する事が述べられた後、「判断例の総体 ein Ganzes von Urteilen が我々にとってもっともなもの plausibel となるのである」と言われる。続くシークェンスVIで思考の主題は「限界あるいはムーア知の起源」へと移行するのだが、それは不連続的になされるのでなく、シークェンスVI冒頭の§141において先ず「判断例の総体」という概念が「命題の全体系 ein ganzes

System」として連続性と変化をない混ぜた形で受け継がれ、同時に「我々にとってもっともなものとなる wird uns plausibel gemacht」という事態が「信じる glauben」という行為へとずらされた上で次のような思考が提示される。

> 何かを信じはじめる時我々は個々の命題ではなく命題の体系全体を信じ始める。・・・(§141)

この思考の中には「命題の体系を信じ始めること」としてすでに「限界の起源」という主題が埋め込まれているのであり、それが以下シークェンスVIにおいて徐々に展開されてゆくのである。ここに見られるある主題から別の主題への思考の移行の様式は、一方でこの移行において主題間の論理的・内容的繋がりを媒介としない（例えば「何故なら」や「従って」という表現を用いない）という点で非主題的であり非連続的である。しかし§140と§141の思考は全く断絶しているのでなく、前者で非主題的に用いられた概念(「命題の全体系」、「もっともなものとなる」）が後者の新しい主題（「信念体系の固定部の起源」）を組み立てる要素となるという形で両者は結ばれている。結果としてここには連続性と断絶が入り交じった思考の飛躍が存在し、予測可能な通常の主題的関係に基づいた主題から主題への移行には見られない思考の創出を可能としているのである。こうした思考の移行を換喩的思考運動と呼ぼう。『哲学探究』の序文で「思想が一つの主題から他の主題へと自然な間断ない経過をたどって進行してゆく」と表現されたウィトゲンシュタインの理想的な思考運動とは、例えばこうした換喩的思考運動を通じた創造的思考が体現するものなのだと考えられるだろう。

こうして§§141-142で「我々が信じ始めるのは個々の信念ではなく信念の体系全体である」という概念が提示された後、信じるということがいかにして始るのかという探究を通じて「信念体系の固定部のレリーフ起源説」が非体系的断片的に提示される。すなわちこのサブシークェンスVIaにおいてレリーフ起源説は一挙にでなく、不学テーゼとレリーフテーゼの二要素に分けて別々に示されるのである。不学テーゼとは、ムーア命題のような固定され規範へと転化された経験命題を我々は学ばない、というテーゼであり§143で提示される。そこでは子供が大人から「その山には何年か前に誰かが登った」という話を聞き信じるという例が用いられる。こうしたことを通じて子供は信念体系を形成してゆくのだが、その際この山がずっと以前から存在していたということを子供はそもそも学ばないのである。例を地球ムーア命題に移すなら、不学テーゼが主

張するのは、子供は地球の大きさがどれくらいでそこにどんな海や大陸があるかは学ぶが、地球が自分の生まれる遙か以前から存在していたことなど全く学ばない、というものである。

この不学テーゼはムーア知の非明示性、その起源の記憶の不在を明快に説明する。何故ムーア知の起源が我々の記憶の中に痕跡を留めないのか、それは我々がそもそもそんなことを学んだことが無いからである。ではいかにして学ばれないムーア命題が我々にとって確実で疑い得ないものとして存在するようになるのか。この問いに答えようとするのがレリーフテーゼである。ムーア命題のような信念体系の固定部はそれ自身の確実性によってではなく、それを取り巻く命題の運動によっていわば見えない回転軸のように固定される、とそれは述べる。

> ・・・信念の体系が次第に生じる。そこであるものは動かしがたく確固としており、あるものは多少とも可動的である。確固としたものが確固としているのは、それ自身が明白であったり説得的であったりするからではなく、その周りを動くものによって固定されているからである。(§144)

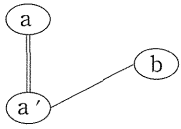
このサブシークェンスａの思考は一旦完全に断絶しサブシークェンスｂによって代わられた後、サブシークェンスVIａ′において二つのテーゼを統合した明確な「信念体系の固定部のレリーフ起源説」が提示される。ウィトゲンシュタインの表現は極めて明快なので、このサブシークェンス全体を引用するのがレリーフ説の最良の紹介であるように思われる。

> 私は自分にとって確固としている命題を明示的に学ぶのではない。後になってから私はそれらを自転する物体の回転軸として見出すことができるのだ。この軸はそれが固定されているという意味で確固としているのでなく、その周りの運動がそれを動かざるものとして規定しているのである。(§152)

> 私が自分の手を見ていない時それは消滅するのではないということを誰も私に教えなかった。私が自分の様々な主張においてこの命題の真理を（あたかも前者が後者に依存するかのごとくに）前提しているのだ、ということもできない。この命題は我々の他の主張からのみその意味を受け取るのである。(§153)

以上がシークェンスVIの思考の骨格をなすものであるが、それは連続した思考により生み出されるのでなく、間にサブシークェンスb（§§145-151）という休止符を挟んだ思考の反復統合により生み出されたものである。そして同じレリーフ説を表現するサブシークェンスaの思考とサブシークェンスa′の思考の純度を比較するなら、この休止符の存在は必然的なものであり、こうした活動と停止の交替、一つの主題と他の主題の交替、というリズムはウィトゲンシュタインの思考が創造的であるために不可欠なものだったと考えられる。今の場合先ずレリーフ説に必要な諸要素をそれぞれ別個に枚挙・提示する場がVIaだとすれば、それらの統合のためにはこの主題に関する思考が一旦活動の表面から退き、他の、しかし全く無縁ではない主題を巡って思考が比較的自由に多方向に試みられている間に一種の熟成過程をへることが必要であったと考えられる。ここでサブシークェンスbとそれに前後するサブシークェンスaとa′の繋がりに注目するなら、サブシークェンスaからbへの移行は「起源」（§144）という主題から「無根拠性」（§145）への突然の思考の転換であり、二つの思考を媒介するものは何も無い。それに対してサブシークェンスbからa′への移行は「確固としているfeststehen」という概念を仲立ちとする換喩的思考運動である。これは前者の移行が思考者による意識的な一つの思考の中断と他への移行を表し、後者がその後様々な思考の網の目を経て元の主題により明確な思考表現を与えるようになるという自然な思考の展開を表していると解釈できよう。そうした思考の熟成を準備した§§145-151の思考は、「確固としているということ」という主題を巡り緩やかに探索されたものであるが、そこで示される思考は追求されている直線的な思考内容によっては包含しきれないものであり、ローカルな思考の生成に直接寄与するというよりは、第二部を超えた更なる思考運動を予期させるものである。このようにウィトゲンシュタインの思考運動における思考の弱拍はローカルで当座の思考運動に熟成の時を与えるとともに、より長期的な新たな思考運動を準備するという戦略的意味を持っていると言えるだろう。サブシークェンスbの思考の一部（とりわけ§150）については第二部全体の緊張について論じ際に取り上げることになろう。最後にシークェンスVIの一体性の概念図を示す。形式的にこれは緩やかな一体性と呼ばなければならないが、シークェンス全体の思考は実質的に明確な主題的一体性を持っている。

＜図９　シークェンスⅣの一体性の概念図＞



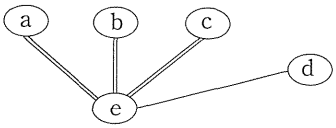
主題的一体性（形式的には緩やかな一体性）

シークェンスⅦ　第二部シークェンスⅦは第一部シークェンスⅨと同じ役割、すなわち思考運動の戦略的結論部という役割を持っている。第一部の見取り図（図１）から読み取れるように、第一部シークェンスⅨはそれまで提示され展開された幾つもの契機・主題が次第にスレッド α とスレッド β という二つの思考の糸に統合された後それらが最終的に融合する場であった。第一部で生み出された思考の様々な要素はシークェンスⅨにおいて可能な限り一つの思考へと統合され、「ムーア言明は誤りの限界を表明する論理的命題である」という思考が第一部の思考運動の到達点として提示されたのである。第二部ではこれと同じ事がシークェンスⅦにおいて行われる。第二部のこれまでの思考はスレッド β＜誤りの限界＞を中心として、そこから派生したスレッド β'＜限界の無根拠性＞、スレッド β''＜限界の起源＞と、それらと断続的に絡まり合うスレッド α＜ムーア解釈＞により生み出されてきた。第二部見取り図（図２）が示すように、これらの思考の糸が合流し可能な限り一つの思考へと融合される場がシークェンスⅦなのである。以下シークェンスⅦの内部構造に即してこの融合の過程をみてみよう。

シークェンスⅦはａ（§§154-158）、ｂ（§§159-161）、ｃ（§§162-164）、ｄ（§§165-166）、ｅ（§§167-174）の五つのサブシークェンスからなるが、始めの三つのサブシークェンスは第二部のこれまでの思考を簡潔に要約していると見ることができる。サブシークェンスａが表現しているのは「誤りと疑いの限界」と名付けるべき思考であり、スレッド β のこれまでの思考のエッセンスというべきものである。他方サブシークェンスｂの思考は「信念体系の受動的起源」とも形容すべきものであり、明らかにレッド β'' の思考を再提示している。続くサブシークェンスｃも「根拠付けの限界」という思考を提示し、スレッド β の思考を再現している。このようにこれら三つのサブシークェンスの思考がその源を容易に特定できるのに対し、続くサブシークェンスｄは周囲のテキストとの

関係の不明確な不定関係テキストであり、しかも支配的スレッドの存在しない思考のカタログである。読者はこの部分で思考の断絶を感じざるをえないだろう。それに対し続くサブシークェンスVIIｅは最初の三つのサブシークェンスの思考が融合される場なのであるが、そこから振り返れば不定関係テキストであるサブシークェンスｄがサブシークェンスｅの思考の部分的な先行的試行であったことが判明するであろう（§165は§170の、§166は§172の先行的試行である）。このようにシークェンスVIIの一体性は単一の主題の共有によるものでも、単一の始点との様々な繋がりによるものでもなく、単一の結論部への融合によるものだから融合的一体性と呼ぶべきものであり、それを図示すると次のようになる。

＜図10　シークェンスVIIの一体性の概念図＞



融合的一体性

サブシークェンスｅは今述べたような意味で第二部全体の結論部である。しかしそこで提示されている「結論」は第二部の全思考の集約点という意味で文字どおりの結論ではない。それは第二部で提示された諸思考をある一つの方向に沿って整合的に統合しうる限りで一つにまとめられた思考であり、そうした統合によって包括されない思考は当然この「結論」には含まれていない。しかもそうして「結論」から漏れた思考はウィトゲンシュタインによって否定されたのでも忘れられたのでもない。それは第二部において出現し試みられながら、第二部内部においてその支配的思考との関係が解明されなかった思考なのである。それは第二部が生み出しながら第二部では消費されなかった思考であり、第二部を生み出したウィトゲンシュタインの思考運動が第二部において停止するのでなく、続いて第三部を生み出す根拠であり源泉となるのである。このことを確認した上でシークェンスVIIの思考を、結論部がいかにして統合生成されるのか、そこに包括されない結論外的思考は何なのかに焦点を当てながら概観しよう。

サブシークェンスａ(§§154-158)では、誤りや疑いに論理的限界が存在し、ムーア命題がそうした限界を表す、というシークェンスⅠとシークェンスⅣで展開された思考がより明示化・統合化されながら反復されている。例えば次に引用する§155はⅠａ′(§§71-75)で展開された思考の明瞭で簡潔な統合的反復形態である。

> 人間は一定の状況下では誤り得ない。(この「得ない」は論理的な意味で用いられており、そこで述べられているのは、そうした状況下で人間が偽なることを言えない、ということではない)もしムーアが、彼が確実だと言明する命題の逆を主張したなら、我々は単に彼に同意しないだけでなく、彼を精神障害とみなすだろう。(§155)

続くⅦｂでムーア命題が代表する確実で通常言い表されることのない信念体系(世界像)の起源に関する思考が提示される。それはシークェンスⅢａ′とシークェンスⅥの思考の明示的統合的な反復なのだが、シークェンスⅥの思考の核となったレリーフ説はここで焦点とはならない。代わって焦点となるのがそうした信念体系の起源が受動的で無条件的・無批判な「信じる」という行為にあるという思考である。この思考は次の一連の小節において示される。

> 我々は子供の頃、例えば、すべての人間には脳があるといった事実を習い、それを信じて受け入れる。・・・こうした信念は決して言い表されないかもしれず、それどころかそうだということが決して考えられないかもしれない。(§159)

> 子供は大人を信じることによって学ぶ。疑いは信じた後にやってくる。(§160)

> 私は多くのことを習い、それを人間の権威に基づいて受け入れてきた。そしてその後そのあるものが自分自身の経験によって確証されたり反証されたりするのをみいだした。(§161)

我々の信念の最も堅固で基礎的な部分の起源がこのように受動的で無批判な「信じる」ことであるのなら、それらは「根拠付ける」とか「テストする」といった手続きの及ばない限界であることになる。この「根拠付けの限界」あるいは「限界の無根拠性」という思考が次のⅦｃで再提示されるが、それは例えば次の様な形で表現されている。

教科書、例えば地理の教科書に書いてある事を私はたいてい本当だと思う。なぜなのか。これらの事実はすべて何度も何度も確かめられた、と私は言う。しかし私はどうやってそれを知るのか。どんな証拠が私にあるのか。私には世界像がある。それは真か偽か。何よりそれは私のすべての探究と主張の基盤なのである。それを記述する命題がすべて同じようにテストされうるわけではない。(§162)

このようにスレッド β、β'、β'' という第二部をこれまで支配してきた思考が、あたかも調理前の食材のように改めてテーブルの上に並べられる。いわばそれらが一つの料理へとまとめられる場がサブシークェンス e (§§167-174) なのである。そしてこの三つの要素が統合される方向を決定する調味料に似た役割を果たすのが「ムーア言明の解釈」という主題を核とするスレッド α である。第一部以来ここに至るまでスレッド α<ムーア解釈>は姿を現したり隠したりしながら常に多くの要素を内包する複雑な思考運動の方向を調整してきた。それは「私は・・・と知っている」というムーア言明をどのように解釈するかという選択によってなされる調整である。すでに何度か触れたようにムーア言明の解釈には基本的に二つの異なる方向が存在する。第一はこの言明によりムーアという一個人の具体的な知識が表明されている、という解釈であり、その場合知識とは何であり、果たしてムーア言明においてムーアはその知識を実現しているのかどうか、そしてそれは「私は・・・」という特別な言明形式とどう関係するのかといったことが探究の対象となる。これがムーア言明の私的解釈であり、後述のムーア知肯定的思考系と深く関わるものである。第二の解釈はムーア言明によって表明されているのはムーア命題に代表される一定の命題が我々の言語ゲームの中で特別な論理的役割（一言で言えば「限界」の指標という役割）を担っているということである、というものである。これによれば探究の主たる対象は、言表されざる確固とした命題群としてのムーア命題が我々の言語実践の中で果たしている役割は何か、それはどのように形成されるのか、といったことである。れがムーア言明の公的解釈であり、ムーア知否定的思考系と強く結びつくものである。第一部の末 (§§51-60) で公的解釈がウィトゲンシュタインの思考の方向として採択されて以降、第二部の思考は基本的に公的解釈に沿ったものであった。しかしこれまでの分析が示すように、ウィトゲンシュタインの思考の在り方、進み方は、一つの方向に向かって全てを組織し、それに適合しない部分を取り除いてゆくというものではない。公的解釈はあく

までも第二部の思考の支配的旋律にすぎないのであり、副旋律としての私的解釈に繋がる思考はあちこちに散在しているのである（これについては第六章で論じる)。従ってⅦｅという最終的な融合の場においても、単にそれまでに出現した要素を並べるだけでは思考の統合はなされず、そこには融合の方向を示す誘導器が必要なのである。その誘導器がⅦｅ§171で表明されているムーア言明の公的解釈なのだが、このテキストは思考運動を誘導する目標であると同時にそうした思考運動の到達点であるような所に置かれている。

> 自分が月へ行ったことはないとムーアが想定する主な理由は、誰も月に行ったことはないし誰も行けない、ということである。そして我々はこのことを習ったことに基づいて信じている。(§171)

ここでムーア言明の徹底した公的解釈が示されて、ムーア知の知としての資格は問題にもされていない。ムーアの「私は自分が地球から遠く離れたことがないと知っている」と言う言明に対して、ムーア個人の体験や記憶ではなく、我々が共通して習う物理的事実等がその根拠とされているのである。ムーア命題をムーアを始めとする我々が知っているのは、我々がそのように学んだからであり、そのように学んだとは、大人からそのように言われ、それをそのまま信じた、ということに他ならない。これがムーア命題と我々の認知的関係であり、ムーア「知」の実体なのである。ここでムーア自身の「私は・・・と知っている」という主張は、「私は・・・と学んだ」をへて「私は・・・と無条件に信じた」へと切り下げられ再解釈されているのである。こうして我々に植え付けられたムーア「知」は我々の言語実践において「それ自身は表明されず検証もされないすべての探究と行動の基礎」という役割を担っている。ⅦａからⅦｃまでで提示された思考の諸要素はこうした線に沿って§171を目指して統合されるのであり、テキストにおいてこの統合過程は§167から§170をへて§171へと、今述べたのとは逆の方向で遂行されるのである。

> 我々の経験的言明がすべて同じ地位にはないことは明らかである。何故ならそうした命題を定め、それを経験命題から記述の規範に転換できるからである。
>
> 化学の研究について考えてみよう。ラボアジェが自分の研究室で物質を用い実験し、燃焼においてはこれこれのことが生じる、と結論する。別の時には別のことが起こるかもしれない、と彼は言わない。彼はある決まっ

た世界像を持っているのである。そしてもちろん彼はそれを見出したのでなく、子供の頃学んだのである。私は「世界像」と言い「仮説」とは言わないが、それはこれが彼の研究の自明の基礎であり、それとしては言い表されることも無いからである。(§167)

私は人々がある仕方で私に伝える事を信じる。こうして私は地理的、化学的、歴史的事実等を信じる。そうして私は科学を学ぶのだ。そう、学ぶことはもちろん信じることに依存している。

モンブランが4000メートルであると習い、それを地図で確かめた者は、自分はそれを知っていると言う。

さてここで次のように言えるだろうか：我々がこの様に信頼するというのは、そうすることの価値が立証されているからだ、と。(§170)

『確実性』第二部の結論部シークェンスVIIの融合箇所であるVII e で以上のような形で提示されている思考を第二部の結論的思考と呼ぶことができよう。この結論的思考の内容は次のように要約できる。

第二部の結論的思考：ムーア命題が表しているのは、それ自身は通常言表されることがなく、また検証したり根拠付けたりすることもできない探究と行動の基礎であり、我々にとってそれは誤りえない誤りの論理的限界として存在している。それを世界像、あるいは記述の規範と呼ぶこともできる。こうしたものに関する我々の知識は、我々が子供の頃それを学んだということに依存しており、我々がそれ学んだということは、我々がそれを信じたということに依存している。

上で述べたようにこれが第二部の結論的思考であるとは、『確実性』第二部のウィトゲンシュタインの思考に結論が存在することを意味しない。その逆である。ウィトゲンシュタインの思考様式とは、ある原点となる主題(今の場合「ムーアの問題」という主題) に関して可能な限り多くの、そして振幅の大きな契機を提示し、そのそれぞれを可能な限り広い思考空間へと展開し、その後可能であればそこから幾つかの新しい思考を統合生成しようとするものである。こうした試みが結果として単一の思考の統合をもたらすことは論理的に不可能ではないが、その成功確率は宇宙論的に小さいといわなければならない。ウィトゲンシュタインの思考はそうした統合を目指すものではあるが、同時に最大限の

思考の幅を常に求めるものであり、後者が前者を不可能にする場合結論の存在しないような思考様式なのである。従ってある大きな主題に関するウィトゲンシュタインの思考にとって字義通りの結論というものは、事実上無限遠点にある目標のごときものである。他方ウィトゲンシュタインが『確実性』第二部といった思考運動単位を生成し終結させる際、そこには一つの結論的思考が存在する。それは第一部でシークェンスIXにおいて存在し、第二部でシークェンスVIIにおいて存在する。結論的思考とは思考運動単位の思考を支配する主旋律の要約であり、思考運動単位において生成された思考要素を支配的方向に可能な限り統合したものである。従って結論的思考が存在するところには常にそうした支配的統合に集約できない思考としての結論外的思考が存在する。この結論外的思考が未だ開拓され尽くしていない思考として常に未来の思考運動の源泉となるのである。

シークェンスVIII　シークェンスVIIIは、「私は・・・と知っている」という言明の意味と用法という主題及びムーアによるこの言明の誤用という二つの主題を巡って思考が展開される場である。これらの主題を巡る思考は狭い意味での語の用法のみを対象とするものではなく、知るとはどのようなことなのかという思考と一体のものとして展開されている。『確実性』において知るとはどういうことかという問いと「私は・・・と知っている」の正しい用法は何かという問いが一体となって問われ思考される時、ウィトゲンシュタインは基本的に知識を痛みの様な心的状態の一つのみなす知識観に批判的な立場に立ってきた。この知識観を状態としての知識観と呼ぶなら、シークェンスVIIIの思考は「状態としての知識観批判」という観点に立ったうえで広い意味での「知る」という大きな主題を巡る思考の一部を成している。こうした第二部の思考の展開を考慮すれば、第一部の分析で我々が「心的状態という概念の批判」という主題を核としているとみなしたスレッドδは「知る」という主題を核としていると再解釈すべきように思われる[4]。それゆえ第一部でシークェンスVIIを生み出し、第二部でシークェンスIIサブシークェンスdとシークェンスVIIIを生み出した思考の糸をここで改めてスレッドδ<知る>という名で呼ぶことにしたい。

こうしたスレッドの名称の変更はあるにせよシークェンスVIIIの思考の内容とそれを生み出した思考の糸の由来は明瞭である。それに対しこのシークェンスの思考が第二部の思考全体に対してどのような関係を持っているのかは必ずしも自明でない。というのも第二部でスレッドδ<知る>が登場するのはシー

クェンスⅧとシークェンスⅡのサブシークェンスｄ（これはわずか二小節からなる小さいテキストである）のみであり、思考の主題に関する限りシークェンスⅧは第二部の他の部分から全く孤立しているようにみえるからである。しかし注意深く検討すればこのシークェンスの思考は第二部の結論的思考と複雑ではあるが重要な関わりを持っており、その関わりは『確実性』の思考運動の今後の方向に大きく関与するものであることが明らかとなるのである。

スレッド δ<知る>は元々第一部においてスレッド δ1<「私は・・・と知っている」の意味と用法>とスレッド δ2<状態としての知識観批判>という別々の主題を持つ二つの思考の糸が融合して出現したものである。これら二つの思考の要素の間には複雑な関係が存在する。更にそれらは「ムーア解釈」という主題とも同様の複雑な関係を持っている。第二部シークェンスⅡサブシークェンスｄとシークェンスⅧのウィトゲンシュタインの思考は、これら三つの要素間の関係を巧みに利用して展開されている。そこでは一つが言及されながら他が内包されたり、一つが言明される中で他が暗示されたりということがしばしばなされ、思考の流れは厳然と存在しながらも、それを明示的に捉え表現することは極めて困難なのである。従ってそれらの思考の分析に当たっては、上記の三要素間の関係を解明することが必要となる。以下先ずこの関係の考察を行い、その後にスレッド δ が第二部で生み出した思考の分析を行いたいが、この関係の考察は最終的に「極性を持った思考系」という概念へ我々を導くのである。

先ず心的状態としての知識観批判という主題について考えてみよう。それが展開される時、明示的に語られるか否かによらず、そこには必ずもう一つの知識観が肯定されるべきものとして存在している。それは正当化ゲーム的知識観とでも呼ぶべきものであり、心的状態としての知識観が知るとはある特別な心的状態にあることとみなすのに対し、正当化ゲーム的知識観は知ることを言語ゲームにおいてある事実言明の正当化ができることとみなす。他方「私は・・・知っている」の意味と用法という主題を巡って思考が展開される時、それが言語ゲームという概念を前提としてなされる限り、そこではすでに正当化ゲーム的知識観が前提あるいは内包されていると言っていいだろう。そして事実ウィトゲンシュタインの思考において「私は・・・と知っている」の用法と意味の探究は言語ゲーム概念を前提としており、この主題が登場する時既に、語られると否とによらず、心的状態としての知識観批判が内包され、正当化ゲーム的知識観が前提されているのである。

ここでムーア解釈という主題に目を移し、それと上記二主題の相関について考えてみよう。ムーアの「私は・・・と知っている」の用法は誤りであるとウィトゲンシュタインが言う時、正しい用法として想定されているのは常に正当化ゲーム的知識観に対応するものである。従ってウィトゲンシュタインが「ムーアの誤用」に言及する時、言い表されると否とに関わらず、常に次の事が内包あるいは前提されているのである：心的状態としての知識観は誤りであり、ムーアはその誤った知識観を持ち、それに基づいて「私は・・・と知っている」を用いていたので彼の用法は誤りである。こうした一連の思考を前提としてムーアの「私は・・・と知っている」という言明の本当の意味を探ろうとすれば、ムーアは本当は「私は・・・と知っている」ではなく「・・・は私にとって揺るぎ無く確実だ」と言うべきであった、という風にそれを再解釈せざるをえなくなるのである。この再解釈は常に、「ムーアは本当はムーア命題を知っていると言うことはできず、・・・」という形をとるからムーアの知との切り離し的再解釈と呼ぶことができよう。以上の考察を振り返るなら、次に挙げる六つの思考の要素は互いに密接に結ばれ一つの系を作っており、思考者がその一つを選択すれば、思考の大きな枠組みを根本的に改変しない限り、他の五つも受け入れざるを得ないようになっている、と言うことができるだろう。

正当化ゲーム的知識観
心的状態としての知識観批判
「私は・・・と知っている」の意味の言語ゲーム的分析
ムーアの「私は・・・と知っている」の用法の批判
ムーアと知の切り離し（ムーアとムーア命題の認知的関係が知である事の否定）
ムーア言明の再解釈

これらの思考の要素はすべて対立項を持っている。例えば「正当化ゲーム的知識観」の対立項は「心的状態としての知識観」であり、「ムーアと知の切り離し」の対立項は「ムーア知の認知」である。従ってここには思考要素の六つの対が存在するのである。そして各対には思考の極性と呼ぶべきものが存在している。例えば＜正当化ゲーム的知識観：心的状態としての知識観＞という対の両項は対等で交換可能なのではなく、それぞれ相反する思考の方向性、すなわち極性をもっており、それゆえ両立不可能なのである。上記の六要素が系を作ってい

るとは、それらが六つの対の中の同じ極性を持った思考要素であるということなのである。これら六要素はいずれもムーアによるムーア知の表明に批判的な思考を宿しているから、この思考極性を「ムーア知否定的極性」と呼ぶことができるだろう。その場合これら六要素が作る思考系は「ムーア知否定的思考系」と表現できるだろう。当然これに反する思考極性は「ムーア知肯定的極性」であり、この極性を持つ要素が作る思考系は「ムーア知肯定的思考系」となる。これら二つの思考系はいずれもスレッド δ<知る>により思考が展開される時に生み出されうる思考であり、その意味でスレッド δ が潜在的に内包する二つの対立する思考系なのである。これら二つの思考系を並べると図11のようになる。

<図11　スレッド δ<知る>が内包する異なる極性を持つ二つの思考系>

ムーア知否定的思考系	ムーア知肯定的思考系
正当化ゲーム的知識観	心的状態としての知識観
心的状態としての知識観批判	正当化ゲーム的知識観批判
「私は・・・と知っている」の意味の言語ゲーム的分析	「私は・・・と知っている」の意味の非言語ゲーム的分析
ムーアの「私は・・・と知っている」の用法の批判	ムーアの「私は・・・と知っている」の用法の受容
ムーアと知の切り離し（ムーアとムーア命題の認知的関係が知である事の否定）	ムーア知の認知
ムーア言明の再解釈	ムーア言明の字義通りの解釈

これら二組の思考がそれぞれ系をなしているということは、『確実性』のウィトゲンシュタインの思考の展開の方向と様態に対して決定的な意味を持っている。というのも、一つの思考要素がそれ自身ではいかに哲学的には無意味なものに見えたとしても、その選択は一つの思考系の選択と同義であり、思考系の選択が知識観の選択、言語観の選択を伴わざるをえないからである。それゆえ、例えば、ムーアは手ムーア命題を知っているのかどうか、といった一見無意味な問いが極めて重大な意味を持ちうるのであり、それは『確実性』の第三部以降の思考の展開の中で現実に起こることなのである。

以上の二つの思考系を解釈の座標としながら、スレッドδが第二部で生み出したⅡdとシークェンスⅧの思考を概観しよう。その際注目すべきは各小節の思考が示す極性である。

Ⅱd（§§90-91）はその内容とリズムの双方においてシークェンスⅧの思考を先行的に予示している。始めにその内容について考察するなら、先ず小節としては長大な§90において「視覚的知識観」とも呼ぶべきものが淡々と記述される。それは、知るとは外界の有り様を心の内に投射することだ、という知識観であり、心的状態としての知識観の一種である。この小節の理解しづらい点は、その極性が意図的に抑制されており、この知識観が批判の対象として提示されているのかどうか判断しにくいからである。しかしその末尾で、「確かにこの像は我々が知識に対して持っているイメージ Vorstellung を示しているが、本当にその背後にあるものを示してはいないのである」(§90)，と述べられていることから、弱いながらもその否定的極性を読み取ることができる。すなわち§90の思考は微妙な仕方で心的状態としての知識観批判という思考要素を内包することによりムーア知否定的思考系に属しているのである。このように§90では一般的知識観について思考が展開されるが、続く§91で一転して「地球は・・・存在していたことを私は知っている」というムーアの言明に関して思考が展開される。ここには思考の断絶と飛躍があり、「知る」という共通点は持つもののこれら二つの小節の思考がどのように関連しているのかは極めて漠然として把握しがたいものである。しかし極性を持つ思考系という概念をそれらに適応すれば、この漠然とした結びつきがはっきりと姿を現すのである。§91末尾で、「しかし彼［ムーア］は自分が確信していることに対して正しい根拠を持っているのか。というのも、もしそうでないなら、彼はそれを知っていないのだから」、と言われる。この思考は正当化ゲーム的知識観を前提として初めて成立するものである。従って§91の思考も§90と同じようにムーア知否定的思考系に属するのであり、それら二小節の間の捉えがたい結びつきとは、共にムーア知否定的思考系に属するということなのである。極性を持つ思考系を介したこの微妙な思考の関係は次に見るようにシークェンスⅧでより明示的な形で姿を現す。

Ⅷa（§§175-177）では一種の主題提示という形で「私は知っている」という言明の用法分析がなされるが、この言語ゲーム的分析は同時に正当化ゲーム的知識観の提示なのであり、言語ゲームという分析手段が実はある知識観を既に内包していることを示す好例である。続くⅧb（§178）でムーアの「私は知っ

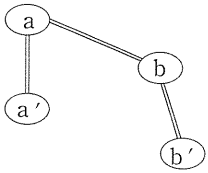
ている」の誤用が批判されるが、それは同時にムーアが心的状態としての知識観を持っていたことの批判であり、ここでのウィトゲンシュタインの思考は明確にムーア知否定的思考系の中で運動している。続くⅧa′(§§179-180)では言語ゲーム的分析というよりは「知る」という概念と「信じる」という概念の比較がなされるが、比較のポイントは「信じる」が心的状態であるのに対し、「知る」はそうした状態ではない、ということであり、この比較の背景には、「だから知識を一種の心的状態とみなすことは誤りである」という心的状態としての知識観批判が控えている。ここでもウィトゲンシュタインの思考は同じ思考系の中を動いているのである。続くⅧb′(§181)でムーア言明の再解釈がなされるが、いうまでもなくそれもムーア知否定的思考系に属する思考である。このようにシークェンスⅧを形造る各思考は明示的な結合関係が指示されていないにもかかわらず、同一の思考系に属することにより明確な思考的結合関係を表しているのである。

ついでⅡdとシークェンスⅧの間の思考のリズムに関する結びつきを考えてみよう。Ⅱdが示している思考のリズムとは、「知る」という同一の主題について、先ず一般的な相の下で考察し、次いでムーアの「私は・・・知っている」という言明との係わりにおいて具体的な相の下で考察する＜一般的思考＞－＜具体的思考＞というリズムである。これら二つの思考は主題的共通点は持つものの、その間には何の直接的結びつきもなく、この思考の移行は突然の転移である。他方シークェンスⅧはa、b、a′、b′の四つのサブシークェンスからなるが、a、a′では「知っている」について一般的に思考され、b、b′ではムーアの解釈あるいは批判について思考が転移しており、全体として＜一般的思考＞－＜具体的思考＞＜一般的思考＞－＜具体的思考＞という思考のリズムを示しており、シークェンスⅡのリズムが拡大された形で反復されているのである。

さて最後に以上の「知る」という主題を巡って第二部で展開された思考と、第二部の思考の本流である結論的思考（シークェンスⅦ）との関係について述べなければならないが、極性を持つ思考系を仲立ちとすれば、それがどのようなものかは最早明らかだろう。シークェンスⅦで統合された第二部の結論的思考は、§171に最もよく現れているが、ムーアとムーア命題の認知的関係を「知」から「学」へと、「学」から「信」へと切り下げることに依存している。すなわちそれはムーアはムーア命題を知っているのではなく、ムーアの「私は知っている」という言明は表現の誤用であることを前提とする思考なのである。言い

換えれば第二部の結論的思考はムーア知否定的思考系を前提として初めて思考として整合的に統合され得るものなのである。それゆえシークェンスⅧの思考は、こうした結論的思考によって語られることなく前提されていた思考としてのムーア知否定的思考系を言葉にして語り直すという役割を第二部全体の中で持っていると考えられるのである。最後にシークェンスⅧの一体性の概念図を次に示す。

＜図12　シークェンスⅧの一体性の概念図＞

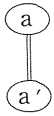


主題的一体性

シークェンスⅨ　シークェンスⅨはシークェンスⅧと同様に第二部の結論部の後に位置していおり、一旦結論的思考として統合された第二部全体の思考に更に何かを試みる場として存在している。ただその試みられている何かはシークェンスⅧとシークェンスⅨで大きく異なっている。シークェンスⅧでは結論的思考で前提されていたことをなぞり明示化することが試みられた。そこでは結論的思考そのものを突破し新しい領域が試みられる事は無かった。それに対しシークェンスⅨでは、結論的思考で展開された体系の論理を更に推し進め、思考者ウィトゲンシュタイン自身がその中に生きている体系（それは「限界」としてウィトゲンシュタインという「私」に体験されたものである）の外へ出て、その他の体系との同等性・相対性を直視することが試みられる。もしこの試みが完全に遂行されたなら、それまで思考者に疑いと誤りの限界として体験されていたもの（ムーア命題）は最早限界としては体験されないことになろう。こうしたことが果たして可能なのか、すなわち思考者であることと自らの限界を非限界視することが果たして両立するのかという問いはウィトゲンシュタインのみならず我々自身の前にも生きた問いとして横たわっているものである。従って体系の外に出て自らの限界を非限界視するというのは一種の理念的目標点であり、ウィトゲンシュタインが現実にシークェンスⅨにおいて到達した地

点はこの目標点そのものではない。それは一言では言い表しがたい微妙な場所である。それゆえその場所を正確に見極め表現するためには、シークェンスⅦの結論的思考においてウィトゲンシュタインが到達した地点が正確にどこであったのか、シークェンスⅨの思考（すなわちスレッド ξ）の先行的予示（Ⅲａ（§105）、Ⅲａ′（§108）、Ⅴａ′（§132））においてウィトゲンシュタインが何を試みどこまで思考の偵察に赴いたのかを先ず明らかにすることが必要である。シークェンスⅨの一体性そのものは明快な主題的一体性であり、図示すると次のようになる。

＜図13　シークェンスのⅨの一体性の概念図＞



主題的一体性

シークェンスⅧの結論的思考においてウィトゲンシュタインは我々の体系を子供の頃の習得へと還元し、更にこの習得を受動的無条件的信頼へと還元した（§§167、170、171）。こうした思考の傍らには「従ってその信頼には何の根拠もない」という思考がほとんど口をついて出そうな位置に横たわっている。そしてシークェンスⅧでウィトゲンシュタインが現実に到達し、言葉という姿を与えたのは、こうした根源的信頼の無根拠性を限りなく強く示唆するという思考であった。すなわち§171末尾でウィトゲンシュタインは「我々がこのように信頼するのは、そうすることの有効性が立証されているからだと言えるか」と反問し、§172では、「人は多分「この信頼の背後にはある原理が存在するに違いない」というだろう。しかしそうした原理に何ができるのか、それは「真とみなすこと」の自然法則以上のものなのか」と反問することで結論的思考は終結するのである。ウィトゲンシュタインが到達したこの地点を§170の小節番号にちなみ仮に「170地点」と呼ぶなら、思考の170地点は次のように表現できよう。

思考の170地点：思考者自身の体系（限界）を原初的な無条件的信頼へと還元し、その信頼の無根拠性を強くほのめかす思考

第二部結論部でのウィトゲンシュタインの思考の到達点はこの170地点である。この思考は今にも自分の体系の外へ出てそれを相対視しようとしながらも、その手前で止まっている思考であり、実践の論理とは全く異なる方向を持ちながらも、それと引き返せないような非和解的関係に陥る最後の一言を未だ口にしていない思考である。

続いて三箇所のスレッドξの先行予示のそれぞれについてみてみよう（先行予示の場所については図3参照）。第一の先行予示である§105の全文は次の通りである。

> ある仮定のあらゆるテスト、あらゆる確証、あらゆる反証はすでにある体系の内部で生起している。しかもこの体系はすべての議論の多少なりとも恣意的で疑いうる出発点なのではなく、我々が議論と呼ぶものの本質に属しているのである。この体系は出発点というよりはむしろ議論の生命領域なのである。(§105)

ここでは前半と後半で（厳密な意味で相矛盾はしないが）相反する方向をもつ思考が示されている。前半では我々のすべての真理行為が、従って真理が無条件・無制限に妥当するのでなく、ある体系の内部においてのみ妥当することが述べられている。明らかにこれは体系の論理に属する思考である。翻って後半では、その体系というのが我々が勝手に決めたりできるものでも、疑おうと思えば疑えるものでもなく、その内部に置いてのみ我々の議論と呼ぶものが存在しうるもの、言い換えれば我々が議論を行おうとすればそこからは出られない絶対的地平であることが示されている。これは議論者たる我々にとっての体系の絶対性を示す思考であり、実践の論理に近い思考である。従って§105とはある主題や問題を巡って新たな思考を推進する場であるというよりは、体系あるいは限界というものを巡って存在するパズルーその相対性と絶対性の共存というパズルーをそれとして提示する場であるといえるだろう。それは体系の論理と実践の論理が交差する場であり、そこから双方が異なる方向へと分離する場である。こうした思考が位置する場所を105地点と呼ぶとすれば、それは次のように表現できよう。

> 思考の105地点：我々の真理の体系内性を示す一方で、その体系が議論者としての我々に対して持つ絶対性を強調することにより、体系あるいは限界を巡る問題を提示しようとする思考

言い換えるなら105地点は体系の思考の極限と実践の思考の極限の中点であるといえるだろう。体系の思考の極限とは、自らの体系と（それと両立しない）他の体系の間にどちらが正しくどちらが間違っているを決定することはできないと言明する思考であり、実践の思考の極限とはムーア命題は真でありそれを自分は知っていると言明する思考、すなわちムーア自身の思考である。

続く先行予示地点である§108も極めて微妙な思考を表現しているので、少々長い節であるが全文を次に引用する。

> 「しかしそれでは客観的真理は無いというのか。誰かが月に行ったことがあるというのは真または偽ではないのか。」 我々が我々の体系の中で思考する時、いかなる人間もかつて月に行ったことはない、というのは確かである。単にそうしたことを分別ある人間が真面目に我々に語った事が無いというだけではなく、我々の物理学の体系全体がそれを信じることを禁じるのである。何故なら我々の物理学は「その人はどのようにして重力を克服したのか」、「大気なしにどのようにして生きられたのか」、その他答えられない多くの質問に対する答えを要求するからである。しかしこうした問いに答える代わりに誰かが次のように言ったらどうであろうか、「我々は人がどうやって月に行くのか知らない。しかし月へ行った人間は直ちに自分が月にいると分かるのだ。そして君だってすべては説明できないじゃないか。」我々はこのように言う人間から精神的に極めて隔たっていると感じるだろう。（§108）

冒頭の引用符で囲まれた疑問、「それでは客観的真理は無いというのか」、は体系の論理に対して必然的に投げかけられる問いである。そしてそれに対して、「客観的真理は存在しない。すべての真理は体系に相対的であり、複数の体系に対してどれが正しくどれが間違っているかを決めることはできないし、私の体系が他の体系に対してより正しい訳ではない」と答えるのが体系の論理の極限である。この問いに対して§108は直接答えるのでなく、複雑な経路により微妙な思考を示そうとする。先ず月ムーア命題は確実であるが、それはあくまで我々が我々の体系内で思考する限りのことである、と言われる。一見するとこれはムーア命題の真理が体系に相対的である事を無条件に認める思考であるかにみえる。しかしよく考えれば、「我々が我々の体系内で思考する限り」という条件は極めて微妙なものであることがわかる。もし我々が体系から体系へと自由に移動し、いずれの体系においても思考しうるのならば、この条件は通常の

一条件である。しかしここで言う体系とは、例えば、「地球は自分が生まれるずっと以前から存在していた」といった疑いと誤りの限界であり、その逆がまともには考えられないもの、それを否定する人を理解するのが困難であるようなもの、である。とすれば我々が我々である限り、そして私が私である限り、私は私の体系外で思考することはできないのではないか。この条件は、実はそれが成立しない場合が本当に存在するかどうかが疑わしい条件なのである。しかしこの条件をあたかも通常の一条件であるかのように語り示すところに§108のウィトゲンシュタインの思考の微妙さ、複雑さが存する。こうした微妙さは、続いて我々のとは異なる体系が示された時、その異体系に対する対応によっても示されている。月旅行の可能性に関する奇妙な答弁が象徴するのは我々にとって受け入れがたい別の体系である。そうした体系に対する明瞭な対応は次の二つである。第一はそんな体系は間違っている、理解できないという対応(その例としては§155を参照されたい)であり、実践の論理の極限である。第二は、我々が通常正しいと思っている体系もこうした体系と真偽という点に関しては何ら変わるところがなく、どちらが正しいかを言うのは無意味である、という応答であり、これが体系の論理の極限である。こうした両極を参照しながら§108末尾のウィトゲンシュタインの対応を再度みれば、その微妙さが浮き彫りになる。そこでウィトゲンシュタインはどちらの体系も同等だとは言わないが、彼らの体系は理解しがたいとも言わない。「精神的にきわめて隔たっている」と言うのである。この表現は他の箇所で何度も用いられている「精神障害」という表現に比べればはるかに穏やかなものであるが、実質的には拒絶を意味している。この微妙な§108の思考を思考の108地点と呼ぶなら、それは次のように表現しなければならない。

> 思考の108地点：我々の真理概念の体系内性と他の体系の存在可能性を明示的に認めながら、そうした他の体系に対する知的拒絶の態度を緩やかな仕方で示す思考

これまでに登場した思考の三つの地点（170地点、105地点、108地点）の相対的位置関係をここで正確に表現するのは不可能である。というのもそれらはそれぞれの小節の持つ固有の言語表現に密着した思考であり、決してその内容を一般的抽象的媒体により抽出し、ある普遍的論理空間の中にプロットできるようなものではないからである。それはウィトゲンシュタインの思考運動が、予め存在する抽象的意味内容に言語的表現を与える過程ではなく、一種の文学行為

として言葉を紡ぎ、テキストを出現せしめる中で、その特定の形の言葉に宿る思考を響かせてゆく過程だからである。従ってこれら三地点の思考を我々がどのように比較しようとも、例えばその一つが他と論理的に矛盾するとか含意されるとかいう具合に比較しようとも、それは必ず我々自身の言葉による一つの比喩の創出であり、我々自身の文学行為なのであるが、そうしたことを確認した上でおおよそのことを言えば、170地点と108地点は共に105地点と体系の論理の極限の間に位置し、それらの中では170地点がより体系の論理の極限に近い、といえるだろう。最後にこうした思考の地図の中でシークェンスIXの思考がどのように位置づけられるのかを検討しよう。

シークェンスIXはａ(§§182-188)とａ′(§§189-192)の二つのサブシークェンスからなるが、それぞれの思考の位置する場所はほぼ同じである。両者の主要な違いはその内的リズムの違いである。同じような思考が続いて反復される際にこれまで何度も見られたことだが、最初の周期の思考はより試行的で間接的であり、反復された周期の思考はより直接的である。サブシークェンスａでは§§182-188の七つの小節中ウィトゲンシュタイン自身の思考の言葉を運んでいるのは§§185、188の二小節のみである。それらに先行する小節、すなわち§§182-184と§§186-187はウィトゲンシュタイン自身の思考を展開するための一種の踏み台となる他者の思考、対象化された他者の思考である。この対象化された他者の思考は、体系の内部において限界を限界として、確実性を確実性として体験し表明する者の思考である。もちろんこうした確実性の内的表明は別の箇所では何度もウィトゲンシュタイン自身の思考として言葉として表明されている(例えば§155)。しかしここではそうした思考と言葉からウィトゲンシュタインは完全に身を引き対象化している。この思考態度を最も良く表すのが§§183、186、187において小節全体にかけられた引用符である。もしこうした引用符がなければ、場合によってはウィトゲンシュタイン自身の確実性の表明であり、実践の論理の展開であり得た同じ言葉が次の様に引用符に入れられることで、それ自身の力と生命を失いそれに続く正反対の極性の思考の踏み台、餌食と化するのである。

> 「私はナポレオンが実在せず作り話だったと想定することはできる。しかし150年前に地球が存在しなかったと想定することはできない。」(§186)

このように引用化され対象化され踏み台とされた実践の論理的思考にウィトゲンシュタイン自身の体系の論理的思考が続くという周期が二度繰り返され、サ

ブシークェンスａ全体としては（§182-§183-§184）-§185-(§186-187）-§188というリズムが刻まれるが、それは＜他者の対象化された思考＞－＜自己の地の思考＞－＜他者の対象化された思考＞－＜自己の地の思考＞というリズムであり、弱拍である対象化された思考と強拍であるウィトゲンシュタイン自身の思考の鋭い交替は思考とテキストにゆれを与えている。

さてこうした思考の弱拍である対象化された思考に続く二つのウィトゲンシュタイン自身の思考を運ぶ二小節の第一は次の通りである。

> ナポレオンの存在を疑おうとするのは私には笑うべき事の様に思われる。しかしもし誰かが150年前の地球の存在を疑うなら、多分私は耳を傾けようとするだろう。何故ならその人は今や我々の証拠の体系全体を疑っているのだから。この体系が、その内部での確実性よりも確実であるように私には思われない。(§185)

『確実性』のこれまでの思考全体を考慮するなら、これは驚くべき言葉である。150年前の地球の存在、それが疑い得ないものであること、それを疑うことは疑いとしての意味を失うこと、という地球ムーア命題の限界性の確認から『確実性』の全思考は開始されたのである。従って150年前の地球の存在を真剣に疑う人間に、どのような形であれ理解を示すというのはこれまでの思考からは極めて離れた地点に属することである。それは108地点を遙かに飛び越した場所であり、明らかにここでウィトゲンシュタインは体系の論理の極限にぎりぎりまで近づこうとしている。第二の強拍でも同じ事が違う言葉で試みられている。

> 当時の地球の存在を疑う人は確かに歴史的全証拠の本質を侵害しているように私には思われる。しかしその証拠が確かに正しいと私には言えない。(§188)

このように体系の論理の極限に近づいた思考がどこまで維持できるのかはここではまだ不明である。それはこのような地点において「私」がなお思考者として存在できるのか、「私」として存在できるのかが不確かだからである。「その証拠が確かに正しいと私には言えない」という「私」が誰でありうるのか、そうした問いが今後この思考に突きつけられざるをえないのである。§185と§188が示している体系の論理の具体的形態を思考の188地点と呼ぼう。思考の188地点とは次のような思考である。

思考の188地点：自らの体系の根底に対する懐疑や否定に対して自らの体系の正しさを主張することを断念あるいは否定する思考

基本的にサブシークェンスa′ではサブシークェンスaでなされたことが異なった言葉でより直接的になされており、その分析を繰り返す必要はないと思われる。ただ一つそこで注目すべきなのは§191において「事実との一致」という概念を批判する形で体系の思考の極限が試みられるということである。この概念が『論考』の根本的概念であったという歴史的興味はさておき、「事実との一致」の批判は第三部の思考が展開してゆく上での重要な契機となるのであり、その意味で第二部と第三部の思考の換喩的結合的関係の一端がここに存在しているのであり、ウィトゲンシュタインの思考のスタイルはここにも記されているのである。

最後に体系の論理と実践の論理の間に存在する以上の様々な思考の相対的関係を概念的・比喩的に示す。

＜図14　体系の論理と実践の論理の間に存在する様々な思考の位置＞

・実践の論理の極限　・IIIa §105　・IIIa′§108　・VIIe §170　・IXa §188　・体系の論理の極限

5．ウィトゲンシュタインの思考運動単位の一般的構造と『確実性』第二部の構造

本章では思考運動単位（ムーヴメント）としての第二部の思考運動全体の構造について考察するが、これまでの第一部と第二部の分析からウィトゲンシュタインの思考運動単位が共通して持つ骨格的構造を先ず把握し、その後にその骨格構造が第一部と第二部それぞれでどのような具体的形態において実現されているのかを解明することによりこれは最も良く成し遂げられると考えられる。

第一部と第二部の分析から浮かび上がってきたウィトゲンシュタインの思考運動単位の持つ共通の構造の第一は、その前半部において複数の主題を巡る複数の思考の糸（スレッド）の同時的並列的活動として思考運動が開始・展開されるということである。こうして同時並行的に展開される主題（スレッド）は第一部では、「ムーアの観念論批判」（$\alpha 1$）、「ムーアの言説の積極的意義として

の「誤りの限界」」(α2)、「ムーアの知識観と「私は・・・と知っている」の用法批判」(α3)、「疑いと誤りの限界」(β1)、「限界の論理的性格」(β2)、「観念論批判」(γ)、「「私は・・・と知っている」の用法」(δ1)、「状態としての知識観批判」(δ2)の多数に上り、第二部では「ムーア解釈」(α)、「誤りの限界」(β)、「限界の無根拠性」(β′)、「限界の起源」(β″)の四つを数える。思考運動単位の前半部でかくも多数の主題が同時並行的に展開されているために、ウィトゲンシュタインのテキストは極めて散漫で複雑な外観を呈さざるを得ず、それを相互に緩やかな主題的関連を持った複数の独立した思考の無秩序な集積であると解するのは読者にとって自然なことである。しかしこれが単なる仮象にすぎず、一見無関係にみえる複数の並列的思考が実は大きな視野と構想に基づいた準備的配置である事は、第一部、第二部いずれにおいてもそれら多くの思考の糸をできる限り単一の思考へと収束させる場としての結論部が存在していたことから明らかである。こうした場を思考運動単位の収束部と呼ぶなら、第一部の収束部はシークェンスIV、VII、IXの三箇所であり、第二部の収束部はシークェンスVIIである。すなわち第一部前半で登場し展開された主題(スレッド)の中でα1、α2、α3、β1、β2はシークェンスIXにおいて可能な限り単一の思考へと統合され、γはシークェンスVIにおいて、δ1とδ2はシークェンスVIIにおいて統合されるのである。第一部に三箇所の統合場所が存在しているというのは、それら三つの思考を更に単一の整合的な思考へと統合することが第一部の段階では未だ不可能であったためと理解できる。これら三つの統合場所の中では、シークェンスIXが最も中心的であり、第一部の思考全体はこのシークェンスIXでの統合を目指して次第に展開されてきたということができる。この意味でシークェンスIXは第一部の主要な収束部であり、そこで統合された思考(「ムーア言明は誤りの限界を表明する論理的命題である」)を第一部の結論的思考と呼ぶことができる。

これに対し上で示したように第二部の前半部で登場し展開された四つの主題(スレッド)α、β、β′、β″はすべてシークェンスVIIにおいて単一の思考へと統合されており、そこで統合された思考が第二部の結論的思考である。このように前半部で並列的に展開された複数の主題(スレッド)が可能な限り単一の整合的思考へと統合される場としての収束部が存在し、そこで統合される思考としての結論的思考が存在する、というのがウィトゲンシュタインの思考運動単位が持つ第二の構造的特性である。

第三の構造的特性は思考運動がこうした収束部において停止するのでなく、

その後に後収束部とでもいうべき部分があり思考運動全体に対して独特の役割を果たしているということである。こうした後収束部は第一部ではシークェンスXであり、第二部ではシークェンスVIIIとIXである。第一部の分析で明らかになったように第一部シークェンスXの思考は第一部のそれまでの思考と全く独立したものである。それ自身を見れば『確実性』の思考運動とは無関係とすらみえるその思考の役割は第二部シークェンスIIサブシークェンスb″に至るまでは想像も着かないものであるが、そこに至った時に第二部の思考の一部を先行的に予示していたことが判明するのである。これに対し第二部の後収束部は上の分析で示されたように収束部の結論的思考と密接に結びついている。一言で言えばそれらは収束部でやり残した思考を補足的に展開する場なのである。従って第一部の後収束部は予示的後収束部であり、第二部は補足的後収束部であるといえるだろう。こうした後収束部は一見すると単なる付け足しのようにも見えるが、その存在は第一部と第二部が思考運動単位として一体性を持ちながら同時に思考運動が次に続くことを保証しているのである。すなわち後収束部の存在は、思考運動を形成する顕在的・潜在的諸要素の全てが収束部で統合されつくしたのではなく、未だ尽くされざる主題・思考資源が存在することを示しているからである。

以上の分析をまとめると、『確実性』第一部と第二部を例とするウィトゲンシュタインの思考運動単位は、前半部、収束部、後収束部、という三つの構造的部分からなっていることになる。更にこの前半部はその機能に従って提示部と展開部に分けることが可能であり必然である。提示部とは各主題(スレッド)が最初に提示され以下の思考運動の起点となる場であり、展開部とはそうして出現した主題が様々にいろいろな方向に展開され思考が試される場である。第一部に関していえば、すべての主題（スレッド）はシークェンスIに起点を持ち、シークェンスIが明瞭な提示部として存在している。各主題（スレッド）の展開部としては、スレッドαの展開部がシークェンスII、III、Vの三箇所、スレッドβの展開部がシークェンスII、III、IV、VIIIの四箇所、スレッドγの展開部がシークェンスIII、スレッドδの展開部がシークェンスIII、Vの二箇所であるということができる。

第二部についていえば、その提示部は第一部の様に冒頭のシークェンス全体を占めるという分かりやすい形態ではないが、例を通じた主題提示や問いの提示という形で確固として存在している。例えば既にシークェンスIの分析でも触れたが、「誤りの限界」(スレッドβ)の提示部はシークェンスIの自分の住所

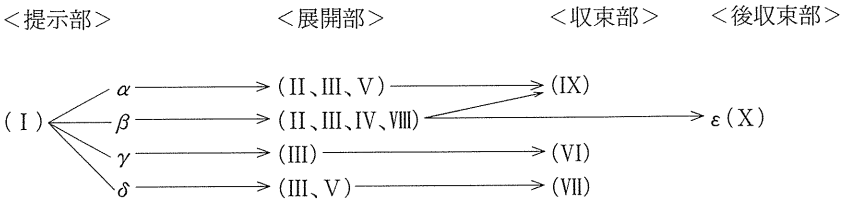
を覚えられない人についての「この人はこの誤りとどのように関係しているのか」(§67) 問いう問い掛けと、それに関連した「問題は論理学者ならこれについて何と言うかである」(§68) という問いかけである。同様に主題「ムーア解釈」(スレッド α) の起点はシークェンスII冒頭のムーアに関するやや長大な§84であり、主題「限界の無根拠性」(スレッド β') の起点はシークェンスIの途中で何気なく問い掛けられる問い、「そして[検算を二十回してもより確実にはならないということの] 根拠を私は示すことができるのか」(§77) であり、もう一つの主題「限界の起源」(シークェンス β'') の起点はスレッド α の提示部であった§84の中の「しかし興味があるのは [地球ムーア命題] が知られるということ、そしていかにして知られるかである」という小さな潜在的問いである。

他方第二部においてこれら四つの主題が展開される場所は、「ムーア解釈」(スレッド α) がシークェンスII、III、IV、Vの四箇所、「誤りの限界」(スレッド β) がシークェンスI、II、III、IV、V、VIの六箇所、「限界の無根拠性」(スレッド β') がシークェンスI、II、III、IV、Vの五箇所、「限界の起源」(スレッド β'') がシークェンスIII、IVの二箇所である。

以上の分析と考察をまとめるなら、ウィトゲンシュタインの思考運動単位は、<提示部>、<展開部>、<収束部>、<後収束部>という四つの構造的部分を持っており、彼の思考運動はこうした異なる四部分を次々と生み出すことにより一体性を持った思考運動単位として生起・完結しながら、同時にそこで終結することなく続く思考運動を予期しているのである。特に彼の思考運動が<提示部><展開部>に続き<終結部>という構造的部分を持っているということは、ローカルに見ればあまりにも多くを含み多方向へ発散しようとしているために構造と展望なくその場その場で展開しているという印象を与えかねないウィトゲンシュタインのテキストが実はグローバルな構造と長期的視野を有していることを示している。その構造は章節番号や見だし、あるいは様々な論理的接続詞といった通常の構造化表現によって可視化されていないが、それにもかかわらず確固として存在するのである。こうした見えない構造を見、隠れた繋がりに触れる時に始めて、我々はウィトゲンシュタインの思考の生きた息吹と鼓動を知覚し、その真の価値の一端に触れているのだということができるだろう。

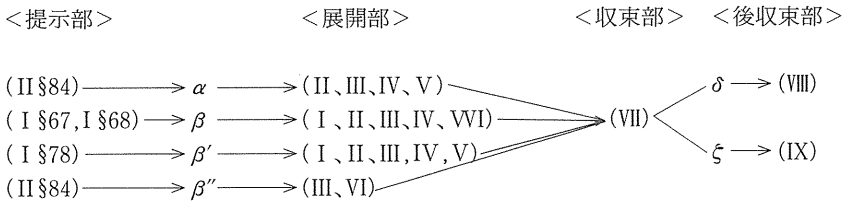
最後に四つの構造的部分に沿った第一部と第二部の構造図を示す。

＜図15　『確実性』第一部の構造図＞



（ギリシャ文字はスレッドを、ローマ数字はシークェンスを表す）

＜図16　『確実性』第二部の構造図＞



6．『確実性』第二部の剰余の思考

すべての思考は領域と方向を持つ。思考はそれが応えようとする主題と問いかけの形作る思考領域に位置し、その領域においてある方向へと運動することにより思考として生命を得て存在する。この思考の方向という点に関してウィトゲンシュタインの思考運動は常に相反する二つの原理に突き動かされている。先ずそれは本論冒頭で引用した『哲学探究』序文でも言われているように、ある思考領域の中で可能な限り多くの方向へと運動し、その領域を「旅し尽くそう」とする衝動に駆られている。この衝動はウィトゲンシュタインのテキストに「集積」、「アルバム」、「断片」といった外見をもたらすものである。しかしこの外見は単なる外見に過ぎない。というのもウィトゲンシュタインの思考運動は常にもう一つの衝動、それら多方向の思考を一つの大きな整合的思考へと統合しようとする衝動に動かされているからである。これら二つの思考衝動、拡散的衝動と収束的衝動がウィトゲンシュタインの思考運動に独特のリズム、すなわち前半部において拡散し後半部において収束するというリズムを与えていることはこれまでの分析が示す通りである。これら二つの衝動の共在は単にウィトゲンシュタインの思考のリズムを規定しているばかりでなく、半永続性というその本質的特徴の源泉ともなっている。ウィトゲンシュタインの思考の

大きな特徴は、それが決定的結論に到達することはまず無く、事実上どこまでも継続してゆくかに見えることである。これが半永続性である。この思考の半永続性の源泉は、ウィトゲンシュタインの思考運動において拡散的衝動と収束的衝動の間に常に存在する差異である。すなわちウィトゲンシュタインの思考運動において発散的衝動が生み出すものは収束的衝動によって消費されるものを上回り、そこに剰余が存在する。この剰余こそが一つの思考運動が終結した後に次の思考運動の原動力となるものである。以下で『確実性』第二部の分析の締めくくりとして、第二部の思考運動の剰余が何なのかを考察したい。

『確実性』第二部の収束的衝動はシークェンスⅦにおいて結論的思考を生み出し、シークェンスⅧとⅨにおいてその補足的延長を生み出した。それらがこの衝動の到達点であった。しかし第二部の思考運動はその開始時よりこの到達点を見据え目指して進んできたのではない。当初はより漠然とした方向へと思考運動全体が突き動かされ、次第にその方向が研ぎ澄まされ結論的思考が姿を現し、同時にその方向から逸れる思考として剰余思考が生み出されてきたのだと考えられる。従って先ず第二部の思考運動の原初的方向が何なのかを確認し、次いでそれから最終的な結論的思考の方向がどのように限定されたのかを明らかにすることは、剰余思考の位置を正確に判断する上で有益かつ必要であるように思われる。

この原初的方向はシークェンスⅠに現れる第二部唯一のメタ哲学的言明から読み取ることができる。

> もちろん私の目的は、ここで人がどんな言明をしたくなるのか、しかしそれを有意味になすことはできない、ということを示すことにある。(§76)

このメタ哲学的言明が埋め込まれているシークェンスⅠは誤りの限界という概念の実在性について自分の住所や年齢の知識といった例を用いて真剣かつ肯定的に考察されている場である。従ってここでいう「ここで人がしたくなる言明」とはそれらについての確実性や不可疑性の表明そのものではなく、そうした表明に対して懐疑的な挑戦がなされた時我々がそれによってこの確実性を弁護・防衛しようとする言明であると考えられる。そうした言明とは例えば「だって事実そうじゃないか」、「君はそれが事実じゃないというのか」、「誰もがそれを認めている」、といったものである。ウィトゲンシュタインの目的が「それが有意味ではないこと」を示すことであるとは、こうした正当化が実は正当化になっていないことを示すこと、すなわち我々の限界（そして体系）の無根拠性を示

すことを大方向としてウィトゲンシュタインの思考が先ずは進められていったことを意味していると理解できる。これが単に我々の空想的解釈でないことは、あたかもこのメタ哲学的言明を受けるような形で、結論部であるシークェンスVIIで他から独立した不定関係テキストとして次の一節が埋め込まれていることからも伺えるように思われる。

困難なのは我々の信念の無根拠性を洞察することである。(§166)

このようにムーア命題が象徴する我々の限界と体系の無根拠性を洞察し示してゆくことが『確実性』第二部の思考運動の原初的な方向であると考えられる。体系の論理と実践の論理はいずれもこの方向と両立可能である。すなわち自分の限界・体系の無根拠さを認識した者は、更にそれが他の体系と同等である事を明示的に認めることもできれば、無根拠であれどうであれそれが自分の限界として厳然として存在し実効を持つことを認めることもできる。従ってこの原初的方向への運動は未だ両論理への分岐の手前に位置しており、その途上において初めて両者が分岐し別々に登場するのである。

我々の分析が示すように、この運動の途上で第二部の思考は次第に体系の論理の方向へと収束し、その最終到達点がシークェンスVIIの§185や§188が示す思考であった(図14参照)。それは、自己がその上に立つ大地が虚空に浮かびそれを支えるものが何も無いことを認識するに留まらず、その大地が実は他にも無数に存在する天体の一つにすぎず、それらと同等同価値であり、それを特別視するものは何も無いことをほとんど明示的に認める思考である。

従ってこのように収束していった第二部の思考運動の剰余とは、かかる大地が、その下が虚空であるにもかかわらず他の天体にはない特異性・唯一性を持っていることを主張し譲らない思考でなければならない。そしてこの特異性とはそれが他ならぬこの自分にとって疑いや誤りの限界として現実に存在しているという特異性でなければならない。これが第二部の剰余の思考であり、それは限界という主題を巡る思考領域において実践の論理という極限へ様々な角度から近づく様々な思考として第二部のあちこちに埋め込まれているが、第二部の収束的衝動から外れるこの剰余の思考の究極的到達点は§§117、154、155の三つのテキストによって画定できるように思われる（こうした画定には関与しないが剰余の思考を表現する興味深いテキストとしては§173の第二段落、すなわち§173b がある；特にその§173a との落差に注目されたい)。

前節シークェンスIVの分析においても述べたように§117b ではムーア命題を

疑うことの実践的無意味さが表明される。それは限界を疑うことは現実に我々の生活に何の影響も与えず、従って現実に疑いとしての意味を持たないことを主張する思考である。限界という主題を巡る思考領域におけるこの思考の場所を117地点と呼びたい。

他方§154は限界を疑うことの無益さ・無意味さではなく、その現実的論理的不可能性を表明する思考である。それはムーア命題は仮に誰かがそれを疑うそぶりやしぐさを見せたとしても、我々の実践においてそれは疑いとは解釈されないという意味で疑いの論理的限界であることを「我々」という必ずしも同一性の明確でない語り手として表明する思考である。同じ様にムーア命題が誤りの論理的限界であり、それに関する誤りは最早誤りとみなされず、例えば「精神障害」として分類をされ理解不可能なものとして拒絶されることが「我々」の名において表明されるのが§155である。こうした限界の表明は既にシークェンスⅠでなされており、改めてここで「剰余の思考」等と称して取り上げるべきものではないのではないか、という疑問がここで呈されるかもしれない。しかしこの疑問はある思考内容が思考者自身の地の思考として表明されている場合と、それが更なる思考の対象として提示されている場合の微妙だが重要な差異を無視したものである。後者の対象化された思考の極端な場合が引用符で包囲された思考であり、その例に我々は既にシークェンスⅨサブシークェンスａにおいてに遭遇している。シークェンスⅠにおける限界表明は引用符で囲むという極端な対象化を施された思考ではないが、それに続く思考の素材提供の場として対象化の要素の強いものであり、それをそのままウィトゲンシュタインの声とはみなし得ないものである。それに対してここで挙げた三箇所は、それまでに様々な思考過程を経て、ウィトゲンシュタインが自らの声で自らの思考として限界の実践的現実的限界性を表明する場所であり、それゆえウィトゲンシュタイン自身の到達地点として改めて記録すべき思考なのである。

§154、155で表明されたこの思考、すなわちムーア命題に象徴される限界が現実に疑いと誤りの論理的限界として自らにとって存在している事を「我々」の名において表明する思考の場所を155地点と呼ぶなら、限界という主題を巡る思考領域でウィトゲンシュタインが到達し示した剰余の思考は思考の117地点と思考の155地点の二つであり、それらは次のような思考である。

思考の117地点：自らの限界の無根拠性を認めながら、同時に限界を疑うことの実践的無意味さを明示的に認めることにより自らの限界の実在性をほ

のめかす思考

思考の155地点：疑いと誤りの論理的限界の実在性とその侵犯の理解を拒否することを「我々」の名において表明する思考

以上我々は体系の論理という第二部の収束方向に対する剰余の思考として実践の論理へ向かう思考について考察したが、これらはすべて限界という主題を巡る思考領域(略して、限界という思考領域)において異なる方向を持つ諸思考であり、図14で示した様々な思考との相対的場所関係について語りうるものである。それらの位置を比喩的に示せば次のようになろう。

＜図17　限界という思考領域における様々な思考の相対的位置＞

・IVａ′§117　　・IIIａ§108

・実践の論理の極限　　(両極の中点)　　・IXａ§188　・体系の論理の極限

・VIIａ§155　　・VIIｅ§170

他方『確実性』第二部でウィトゲンシュタインが渉猟した思考領域にはもう一つ「知る」という思考領域があり、その思考はシークェンスVIIIで展開されている。限界という思考領域において体系の論理と実践の論理という対立する方向（極性）が存在し、前者が収束方向であったのに対応し、「知る」という思考領域ではムーア知を知としては否認する方向と、ムーア知を知として是認する方向が存在し、この前者が第二部の結論的思考を補足するものとしてシークェンスVIIIで展開されたというのは前節の分析で述べた通りである。すなわち体系の思考を展開するためにはムーア命題を我々は知っている（従って真である）のでなく、単に極めて強固に信じているのであることがどうしても必要なのである。ということは「知る」という思考領域において第二部の剰余の思考がもし残されているとすれば、それはムーア知を知として是認する方向の思考、すなわち前節で我々がムーア知肯定的極性を持つ思考系と呼んだ（図11参照）ものに属する思考でなければならない。この方向を持つ思考は第二部においてはわずか一箇所において認められるのみであり、しかもそれは極めて弱いものである。そのテキストとは次のようなものである。

そしてこれ［ムーア命題はそれに対するいかなる根拠よりも確固としている、こと］がムーアがそれらのことを自分は知っていると言う時に言いたいことなのではないのか。―しかし本当は彼がそれを知っていることが問題なのであり、それらの命題のあるものが我々にとって確固としたものでなければならいということは問題ではない、ということか。(§112)

この小節の後半で表明されているのは一つのムーア解釈であり、それは「ムーア言明によりムーアが意味したのは文字通り彼がムーア命題を知っているということであり、ムーア命題が我々の体系の中で固定され特別な論理的役割を持っているということではない」という解釈であり明らかにムーア知肯定的極性を持っており、「知る」という思考領域における第二部の結論的思考からは絶対的にはみ出るものである。かすかなものであるが、「知る」という思考領域におけるこの剰余の思考の痕跡は、第二部においてこの領域におけるウィトゲンシュタインの思考も完全に一元的なものではないことを示すとともに、このかすかな思考が今後どの程度展開されるかにより、『確実性』の思考全体の運命が大きく左右されるだろうことを予測させるものである[5]。「知る」という思考領域における§112の極めて控えめなムーア知肯定的思考の表明が位置する場所を思考のW112地点と呼びたい(“W”は“Wissen”の“W”であり、この思考が知るという思考領域に位置することを示す)。それは次のような思考である。

思考のW112地点：ムーア言明を字義通りに解釈し、ムーアが提起した問題はムーアが主張する知（ムーア知）が事実存在することだということを一つの可能性として受け入れようとする思考

このように『確実性』第二部では限界と「知る」の二思考領域における三つの思考（117地点、155地点、W112地点）が剰余の思考として、すなわち第二部全体を統合しようとする支配的思考からはみ出す思考として認められる。しかし第二部において剰余の思考として注目すべきものにはもう一つあるのである。それは「私」というものを巡るものであるが、言葉本来の意味での思考ではない。何故ならそれは「私」という思考領域において表明された思考ではないからである。そもそも『確実性』においてウィトゲンシュタインは「私」というものについて主題的に考察したり語ったりすることはない、つまり『確実性』には「私」という思考領域は存在しないのである。にもかかわらずこれから述べようとするものは、「『確実性について』の主題と構造（中）」で詳しく論じた

ように、今後の『確実性』の思考運動の行方に決定的な係わりを持ってくるものなのである。それは「私」を巡る思考というよりは、「私」に対する思考態度とでも呼ぶべきものである。

それがどのようなものであり第二部の思考全体とどのように係わるのかを明らかにするために、実践の思考と体系の思考の対立についてもう一度考えてみよう。今この大地ばかりでなく他の無数の天体にも自分と同じような人間が住んでいるとしよう。これらの人間はある意味で同等であり、そのどれかが他に対して特異性を持つものではない。この事を表現するのが体系の論理だといってよいだろう。それに対して実践の論理が表明するのは、これら同等の人間が住む無数の天体の中で、この大地は他ならぬこの自分が住むという点で特異であり、それはこの天体のみを自分が大地として体験しうることに由来しているということ、言い換えるなら現に自分が限界として認められるものが唯一自分が本当に限界として体験できるものであり、現実に限界として体験されるもののみが限界であるということである。そしてこの実践の論理に立って無数の天体に住む無数の同様の人間を眺めてみれば、それらの間には次のような大きな差異が存在する。つまりこの大地の上に住む人間群はその中の一人が私であるという意味で「我々」であり、「我々」ではない他の天体の人間群と決定的に異なっているのである。従ってこの「我々」と「我々ならざる者」の間の差異は、「私」とそれ以外の人間の差異に依存し、同時に大地と単なる一天体の差異と深く関わっているのである。つまり実践の思考は「私」と他人の間の解消しがたい非対象性を非妥協的に肯定する態度と深く係わっているのである。しかしこの態度を、「私」を巡る思考とか「私」の思考と呼ぶことはできない。それは既にのべたようにウィトゲンシュタインが、「私」というものは、とか、「私」という語の使用は、という風に「私」を主題化することによりこの態度を表明するのでなく、様々な思考をテキストにおいて表現する際に「私 ich」という語を様々に用いるその仕方により示しているからである。この「私」に対する曖昧で多様でだがある共通性を持った態度が『確実性』第二部において露出するのは§§69、150、174の三箇所である。以下それらを概観したいが、そこで展開されている思考が何であり、そこで表明されている態度が思考の展開とどのように関連するかをここで述べることはできない。明確な内容を持つ思考の生まれる以前の場所にそれらは位置しているのである。先ず§69である。

私は次のように言いたい：もしこれについて間違っているなら、私が述べ

るどんな事もそれが正しいという保証はなくなる。しかしだからといって他人は私についてこう言わないし、私も他人について言わない。(§69)

ここでは確実性あるいは限界性の表明について、それはある者が自分自身についてのみなしうることであるという「私」と他人の間の非対象性の存在が、一つの観察として示されている。この場所でこれは単なる観察に留まり、それに対する思考は展開されないのだが、それが第二部の支配的思考（体系の論理）に対して潜在的に持っている破壊的関係は、そもそも体系の思考・ムーア言明の公的解釈の出発点が、ムーア言明における「私」は重要でないという「私」と他人との非対象性の否定（第一部§58参照）にあったことを想起すれば十分認識できるだろう。

続いて§150。

人はどうやってどちらが自分の右手でどちらが左手だと判断するのか。どうやって私は自分の判断が他人の判断と一致するだろうと知るのか。この色が青だとどのようにして私は知るのか。ここで私が自分を信頼しないならば、何故私は他人の判断を信頼すべきだというのか。その理由は存在するのか。私はどこかで信頼することから始めなければならないのではないか。すなわち、私はどこかで疑わなければならないことから始めなければならない。そしてこのことは言ってみれば早急だが許容できる、というものではなく、判断そのものに属しているのである。(§150)

この小節の末尾で表明されている思考、すなわち我々がどこかで無条件・無根拠の信頼から始めなければならないという思考は既に馴染み深いものであり、なんら問題とすべきものではない。問題はその際に自分を信頼すべきか、他者を信頼すべきか、がここで問われていることである。例えば自分以外の人間が、お前には手はない、と言った時、自分を信頼するか他人を信頼するかという問題である。この問いは第二部の他の場所で全く問われることのない問題だが、体系の論理において他人の権威が持っている意味の大きさを考えれば、将来の思考の展開に大きく関与しうる問いかけであることが分かるだろう。

最後に§174。

私は完全な確実性をもって行動している。しかしこれは私自身の確実性である。(§174)

これもある方向を持った思考の表明というよりは、一つの観察の提示であり、確実性というものがものの如く誰に対しても同じようにあるのでなく、それを感じる本人、それをもって行動する当人に対してのみある事、確実性の主観性、とでもいった観察である。この観察自身は第二部の支配的思考、体系の論理、に反するものだとは決して言えない。しかし「確固としている」とか「確実である」というのが体系の性質としてとらえられている体系の論理に対して、この観察がそれを侵害せずに取り込まれうるかどうかは決して自明ではない。

以上三箇所で見られるのは、ある方向を持った思考でも、そうした思考に随伴する態度でもなく、それらより原始的な、思考が生成されるその素材を探し観察する際の着眼の態度とでもいったものにすぎない。にもかかわらずこの着眼の態度は確実性を巡る「私」と他人の間の非対象性に光を当ててしまっている。それが思考としてどのような方向を持つのかという問題はここには存在しない。しかしこの着眼態度が拾い上げたのは明らかに潜在的なある問題の萌芽であり、第二部の支配的思考にとって重要なのは、この小さな萌芽をそこに収容する場所が恐らくは全く見当たらないだろうということである。

以上のように『確実性』第二部にはその支配的思考に決して包摂されないとみられるものが三思考―着眼態度存在する。第二部にあってほとんど見過ごされそうな小さな目立たないそうした存在が今後の思考の展開を次第に支配してゆくところに、ウィトゲンシュタインの思考の動的で反転的で包括的であろうとする本性が垣間見られるのである。

1．「『確実性について』の主題と構造(上)」『言語文化論集』第46号、pp. 149-179；「同(中)」 前掲誌 第47号、pp. 53-96；「同(下)」 前掲誌 第48号、pp. 23-54。
2．「『確実性について』の主題と構造(下)」『言語文化論集』第48号、pp. 35-37, 46-49, 参照。
3．この図から Baker & Hacker が『哲学探究』のテキストに対して作成した同様のダイアグラムを連想される読者もあろう。事実我々の研究の動機は彼らのものと重なると同時に、それによって励まされたと言える。しかし「図」について言えば、我々のものは彼らのものと一つの大きな点で異なっている。それは我々の図が「部―シークェンス―サブシークェンス」という小節より上位の諸単位の存在を前提として構成されていることである。彼らが行ったようにウィトゲンシュタインのテキストの小節を主題的関係によって結び付けることは常に可能である。問題はその結果生まれたダイヤグラムが何を意味するのかが不明なことである。それがウィトゲンシュタインの思考の運動を表しているとい

うために満たさなければならない多くの前提が、彼らの場合満たされていないのである。cf. G.P. Baker and P.M.S. Hacker *An Analytical Commentary on Wittgenstein's Philosophical Investigations vol. 1*, Blackwell, 1980, pp. 17-20, 75-78, 123-129, 249-250, 267-274.

4．「『確実性について』の主題と構造(下)」、p. 48、および本稿、図1参照．ウィトゲンシュタインのテキストの分析において、ある思考の糸をどのような形容によって最も適切に表現できるかが分析の進展によって変化する可能性は常に存在している。それは我々がある思考の糸をテキストの密林の中から見出した時、常にその全貌を知ることができず、従って記述名ではなく〈誤りの限界〉といった指示的な名を与えうるにすぎないことの反映である。ウィトゲンシュタインの思考に対する我々の知見のこうした常不完全性はその常生成性の反映であり、我々の分析の重大な欠陥ではない。

5．「知る」という思考領域における非結論的思考の痕跡は第一部においても微々たるものであり、§20のその曖昧な表明の一箇所を数えるのみである。